TANKA MAGAZINE

COCOON

Issue 20

JUNE 2021

目次

04	巻頭作品	柴田 佳美　島本 ちひろ　斎藤 美衣　清水 佑太郎
20	特集	このごろ気になる歌 / ずっと気になっていた歌 ①
30	時評	型を揺さぶる　小島 なお
31	四方八方興味津々	田中 泉　松井 恵子
32	うた画廊	三沢 左右
34	作品	山田 恵里　河合 育子　久保田 智栄子　有川 知津子 大松 達知　真島 陽子　伊田 史織　月下 桜
50	COCOON 歌合	三沢 左右×真島 陽子　伊藤 祐楓×片岡 絢
51	エッセイ	エッセイ　早川 晃央
52	歌集 in the news	田宮 智美歌集『にず』 中村 恵
54	特集	このごろ気になる歌 / ずっと気になっていた歌 ②
64	作品	大西 淳子　田中 泉　小川 和恵　白川 ユウコ 礒川 朋美　杉本 なお　中村 恵　片岡 絢

80	特集	このごろ気になる歌 / ずっと気になっていた歌 ③
89	白川昆虫館	白川 ユウコ
90	四方八方興味津々	礒川 朋美　小川 和恵
91	批評会記	中村 恵
92	今読み返す一冊	原 阿佐緒歌集『死をみつめて』 椎名 恵理
94	作品	水上 芙季　松井 竜也　松井 恵子　三沢 左右　伊藤 祐楓 小島 なお　椎名 恵理　渋谷 美穂　早川 晃央
112	評論	高野公彦にとっての皇室と中国・韓国 大松 達知
116	連載コラム	古典和歌はおもしろい　小島 ゆかり
117	エッセイ	COCOON 誕生　大西 淳子
118	アンケート	好きな数字とその理由は？
120	繭の中から	

柴田 佳美
うす雲

丁寧な敬語のやうな花びらを背筋を伸ばし落とすハクレン

小窓からシーラカンスは入りきて部屋の空気の流れはじめる

さしあたり休止中なるボランティアこれは失業するかもしれず

赤ワイン水で薄めて飲みこみぬ　酔ふべきときにさうしてゐます

〈とちおとめフェア〉の幟はためいてしばし炎となる〈とちおとめ〉

炎心をひとつ宿した〈とちおとめ〉春の愁ひの断面図となる

春ひるまセールスマンの勧誘を断れず買ふ三か月分

奥様と呼ばれ寂しさ紛れたりそののち程は寂しからずも

うす雲はカーブミラーでその姿たしかめたのち泳いで行きぬ

包丁は研ぎ上げるたび細くなり鈍色の刃の峰に近づく

昼間見た雲かもしれずほろほろと身のやはらかき鰊の塩焼き

洗ひもの終はつたあとの洗ひもの夜のほとりにいくつ散らばる

百兆のジンバブエドル紙幣ありき驟雨のやうに零は並んで

日本はハイパーインフレではあらず一般会計百六兆円

背負ひ投げまた見たかつた星宿す天に向かつた古賀稔彦さん

洗へない学帽までも洗はれて古いなすびのやうなりわが子

悪疫を背負ひ投げする心にてドライマークもかまはず洗ふ

新品の靴下留める〈ソッパス〉のお節介やきの母になりけり

声変はりした少年が呼ぶときにくきやかになる娘の輪郭

歓談が苦手な娘あつさりと卒業式後のわらわらを出る

春愁のこころ支へる柱にて人はこんなに桜を植ゑる

散る花にまがひただよふ魂のいくつかありて霞は深し

口惜しきことひとつあり思ひ出すエビングハウスの忘却曲線

コーヒーをけぢめなく飲む　混沌の世の鎮まりを待つにあらねど

ロース肉の脂身を切る刃はくもり、まぎれなく春暮れゆかんとす

久方の空を千切つた花あやめふるへ天地はいちめんの紺

輝ける躑躅のまへに護国寺の丹塗り門の色は沈める

陽光に照らされながらゆるやかに体をそらす躑躅のめしべ

濃やかな躑躅の花蜜標識にこの身が蝶でなきこと哀しむ

親切な塾がくれたり計算のタイムをはかるストップウオッチ

怒らない分析しようテスト見て分析できずただ怒りをり

〈スイングバイ〉ときに子どもの勢ひに乗りつつ描く軌道であるよ

島本 ちひろ
十八光年

二階では礼拝堂がしずやかに光湛える子の幼稚園

園長は牧師先生　七十路の下駄と花とを愛する紳士

先生が五人園児が十八人とても小さな幼稚園です

信仰をしている母としない母　礼拝堂の木の椅子につく

思い出が光源となり現在がうまく見えない　桜　逆光

園庭に姫林檎の樹ひとり居て卯月になると花を咲かせる

礼拝は「行う」のではなく「守る」花柔らかな日曜の朝

金色に小口染めしたバイブルを手に講義する牧師先生

紙芝居ノアのはこぶね　方舟の隅で丸まるライオンの雄

後奏を聴きつつ思うユダのこと太宰治の『駆け込み訴え』

「若い日はヨブ記に憤慨したものよ」きよ先生の白き三つ編み

２万５千光年飛びて地を照らす太陽の子を全身で受く

約十年続いた過食嘔吐だがこの半年はぱたりと止まる

木蓮に叱られたいと思うのは私が狡い女だからだ

皿と水受ける重みを深く知る水切りかごの雄弁な錆

ささやかな戴冠式を　朝に注ぐ白き福音ミルククラウン

かみさまを疑わぬ子が子羊の模様のかばん負いて歩みぬ

「おにかいでおそうしきがある日です。きょうはしずかにあそびましょうね」

園庭を出てすぐの道　白色の供花を運ぶ人に会釈す

私だけ茄子をなすびと呼ぶ家でよく晴れた日は布団など干す

500km離れていれば悲しみも遠景になる　里の猫の死

十八光年離れた星に降る光わたしとくーが並んで眠る

「くーちゃんはどこへ行ったの？空の上？」焦げ茶のクレヨン持ちつ息子が

ドロップの缶に使用済み電池溜めていくなりからんかろんと

人型の思い出たちが行列を成して後ろをついてくるのだ

本当は君が錨の方でしょう夜の浅瀬に入りたる六時

ふくろうのようなるタナトフォビアあり首傾けてこちらを見遣る

死について多く語らぬ夫だが夏の遺体は大変と言う

四百年生きれば生に飽きるのかオンデンザメの灰色の皮膚

ほうほうとふくろうが鳴く暗がりを息子はじっと見つめておりぬ

「母さんが死んだらいやだ」薄布団濡らしつつ泣きそのまま眠る

早起きしクレヨン出して黄緑のもやしを描く子いつもどおりに

斎藤 美衣
ひらがなで、君

この町にあなたがゐない日の雪は形保ちてわれに降り来る

さみしいと今感じたるわたくしの脳の一部のはたらきよ愛し

瞑(めつむ)ればあかるき朝だおほき手が空を畳みて胸にしまひぬ

籐かごの林檎かたむく暗がりにやさしき人のこゑが聞こえる

図書館の地下書庫から出て黒髪の人はわづかに年を取りたり

世の中に足りないひかりを集めたるガラスの鉢に金魚を放つ

わたくしの名前呼ぶとき唇を合はせてひらきひらがなで、君

瓶のなか塩は湿りぬ木の匙できのふひとさじ掬ひしままに

死ぬときはみなはじめてで炊き立てのごはんのごとくゐたい春なり

三月のたてがみの見ゆ歩道橋渡りて上から街を見るとき

春のシャワーあたたかきかな湯気立てて濡れた体はあたらしく見ゆ

二十年もとなりに眠る君の手をまだ知らないと指先が言ふ

取り外し可能な気持ちコーヒーにあなたは砂糖をたつぷり入れる

「最後の」とつけてこころで呼んでみる　銀紙、すずな、海溝と駅

ともだちを数ふる部屋の窓の外しろきビニール春風に飛ぶ

桐の木のやうな気配で立つてゐるあなたの影にしづかに入る

こぼれたる時間を受けぬ夜の半ばガスのほのほを丸く点火し

言ひかけて飲み込んだこと多かりきひらき終つたふきのたう達

この空のここからここまでわたしのと決めて真白きシャツを干したり

もう会はぬひかりと思ふ　ＪＲ逗子駅前に夫を待ちぬ

たくさんの言葉を抱いて立つてゐるポストのやうな木のやうな君

植物であると信じて一日を過ごせば午後の日差しが甘し

もう我を忘れてしまつた木の下に涼しき風が今だけ通ふ

ピリオドのやうに散りたるさくらばな排水溝に微発光す

清水 佑太郎
結婚指輪

「先生の夢は何だったんですか」「叶ってそうな人に訊きなよ」
卒アルに初めましての顔ならぶマスクの下はこうなってたか
顔半分見えなくたって恙無く地球は廻るし林檎は実る
A組の担任の嗚咽響きおり開始五分で卒業式、時化
卒業式の呼名で絶対泣くもので副担任でいさせてください
泣かぬよう生徒のハレを見届けようトランスパレント・アイボールとなり

卒アルの真白きページを差し出され「先生、いちばん！」手の掛かる子よ

教え子の答辞の中に吾を見つけ吾の自意識やアルデバランか

妻、歯痛ベッドの隅に座り居り付き添う犬は溜め息をクー

腹のうえでお座りする犬撫で回す鯨の油を搾る手つきで

頬舐めて微温い吐息を吹き掛ける犬の毛の中妻は眠れり

我が犬のための買い物リストあり足拭くやつと首冷やすやつ

犬の爪をノンアルコールの泡で拭くティッシュに現るる砂の蠍座

三十二行三十列のパズル組む令和三年度の時間割

朝早出夜十二時まで残業かいっそこのまま泊まっちゃおうか

死にそうと思えば思うほど強く生の実感、てりやきバーガー

卒業式が重油べったりだとしたら入学式はエタノールかも

三割は呆けてたけれどばあちゃんはまいにち結婚指輪を磨く

誤嚥性肺炎という曖昧な病気で祖母は眠っているらし

愛犬にオヤツをあげて頼み事お前の元気、ばあちゃんにやれ

九十なら大往生です確実に。ビールの缶が積み上がる夜

受け容れることのできない哀しみをアタマで処理したフリには慣れた

東京は緊急事態宣言で鹿児島はもう違う惑星(ほし)だな

夢枕ちっとどま期待しちょったよばあちゃん家(げえ)からわっぜ遠かどん

島本ちひろ

ひきつづき私は私であるでしょう　ところによりあなたをともなって

笹井宏之『てんとろり』

天気予報の台詞の型を踏襲している。なんと美しく切なく悲しく、そしてあたたかい歌だろう！誕生から死まで私は私であり続ける諦念と肯定。そしてあなたをともなうのは「ところにより」なのである。ずっとではない。きっと「あなた」はもう過去の人なのだ。私は、心に残された「あなた」を時折思い出しながらこれからも生きていく。短歌は決して勝ち負けではないけれど、でも、どうしても完敗だと思ってしまう。

もう、いいの。まみはねむってきりかぶの、きりかぶたちのゆめをみるから

穂村弘『手紙魔まみ、夏の引越し（ウサギ連れ）』

この歌集はまみという少女の独白のような体裁で作られていて、キュート&刹那的&退廃的で本当に素敵。収録された全ての歌が大好きだが、こちらの歌は特に好きだ。もういい「わ」ではなく「の」であるところに、まみの悲痛と諦めが滲んでいる。そして彼女が見ようとするのはきりかぶの夢。枝葉を失った彼らを思うまみの分け隔てなさ、そしてうっすりと漂う破滅の匂い。ひらがなのまみの台詞に心奪われる。

早川晃央

いつまでも裏返されぬぬばたまのオセロの駒のあぱるとへいと

黒瀬珂瀾『空庭』

グローバル社会と言いながらも世界の分断はより一層進んでいる。黒人差別の問題もそのうちの一つだ。人種差別をオセロの駒に喩えたり「あぱるとへいと」とあえて平仮名にしたり軽いタッチに見せておきながら、枕詞の「ぬばたま」の存在感が際立たせている。そして「いつまでも裏返されぬ」という表現は黒人の決意であり、今なお黒人を差別し続けている白人の様子でもある。

よき歌を詠もうと思う
言うなれば
宇宙に踏みいる素足のような

島田瞳

啄木のふるさとのである盛岡で、毎年夏に開かれる短歌甲子園。二〇一〇年の大会の「宙」という題で詠まれた歌。初めてこの歌を見た時に「おーっ」と自然と声が出るくらいの衝撃があった。宇宙に踏み入る素足というみずみずしさと単刀直入な表現。同じ作者の歌に「汗」という題で詠まれた「白鳥が／飛び立つようにバー越えて／重力に逆らう君の汗」（／は三行書きの切れ目を示す）という作品もある。

渋谷美穂

濁流だ濁流だと叫び流れゆく末は泥土か夜明けか知らぬ

斎藤史『魚歌』

この歌は二・二六事件が起きた当時に詠まれた歌である。上句は「叫び」「流れ」と動詞を繰り返す事でさながら濁流に飲まれたかのような勢いがある。一方で下句は幾分か引いた、さながら山の上から眺めているような視点と冷静さである。そして結句の「知らぬ」に至っては突き放した印象さえも受ける。初句から結句へ向かっての緩急が特徴的な一首である。

壮大なかかと落としのように日は暮れて花冷えの街となる

服部真里子『行け広野へと』

きっとものすごい早さで暮れてしまったのだろうという様子が目に浮かぶ。日がたちまちに暮れてしまうといえば「秋の日は釣瓶落とし」の言い回しが定番であるが、このかかと落としの速度は釣瓶落としのそれを遙かに上回るだろう。日に日に日が長くなっていると思いきや、唐突に暗くなってしまった街にたたずむ人の心細さは推して知るべし、である。

椎名恵理

喪主である母を支えて立つ兄を見ており風のおとうととして

松村正直『風のおとうと』

父を亡くした事実は、家族にとって等しく悲しい出来事であるはず。支えが必要なほどに憔悴する母とその母を支える兄の近くにいて、自分はふと、まるで淡々と流れる大気であるのかもと気が付く。哀しみの場で、母と兄を冷静に見ている「風のおとうと」は、決して冷たい人ではなく、一方で熱い情を感じるわけでもない。ただ何故だか、「風のおとうと」が佇むこの歌に、どうしようもなく惹かれてしまった。

靴紐を結べば轟く雷鳴の（先に着きたし）地図をひろげる

陣崎草子『春戦争』

雷光は速い。文句なしで速い。では雷鳴は、と言ってもこれも速いのだ。雷鳴の先に着きたいなんて考えること自体が不思議な感覚だ。雷光ではなく雷鳴を選んだ。靴紐を結び、地図をひろげる姿を想像すると、なぜだか前向きで素直な光を感じてしまう。唐突な無邪気さの向こう側に、何かを見つけられる気がしてきてしまうのだ。いつか雷鳴の先に着けるだろうか。

小島なお

生きてゐてごめんなさいと老母言ふごめんなさいねすべての雀

川野里子『歓待』

介護の場面。「ごめんなさい」は本来、自らの行為の非を認め相手に許しを乞う言葉であるはず。それなのに、本人の意志とは関係のない生き死にについて謝罪することのねじれが上句の悲しみを増幅させる。しかし下句をどう読むべきか。生きていることを人の原罪と捉えるのなら、上句で謝罪されている主体もまた同じ罪を抱えていることになる。あるいは命を次代へ繋ぐことが謝罪の連鎖という見方もできるだろう。

あれは旗、いいえTシャツ　こちらだけ七十年も長く生きるよ

北山あさひ『崖にて』

はじめこの歌の意味するところを掴み切れないでいた。しかし「七十年」の語からある時、これは戦争のことを言っているのだと気が付いた。戦争で死んだ者と、戦後を生き続ける私たちの会話なのだと。遠く、たとえばマンションのベランダに白くはためく布が見える。戦死者は敗戦を知らないために降参の白旗と見まがう。私たちはそれをTシャツであると七十年先から教えるのだ。Tシャツがアメリカから来た衣服であることも寂しい。

清水佑太郎

懸命に勤めつつ女は自らを殺してゆくとニュースは結ぶ

米川千嘉子『夏空の櫂』

勤労は自己実現のひとつの手段であると言われる。しかし、労働すればするほど自分の時間はなくなり「自ら」は圧殺される。米川もそのような境遇にあったと推察されるが、「ニュースは結ぶ」という冷静かつ客観的な視点で書かれている。女性の社会進出というと今や化石のような言葉であるが、女性であれ男性であれ、効率化という名の下に個性が擦り潰される悲劇は資本主義が抱える根源的な病であり、通時的な課題である。

死んだことありますかってきいてくるティッシュ配りのおとこを殴る

笹井宏之『てんとろり』

この世の理不尽を凝縮したような歌であり、興味深い。作者は生前に他人を殴ることはなかったろうし、ティッシュ配りでもなかったろうから、フィクションなのだろう。では、その意図は？答えは推測するしかないが、コミュニケーション不全の描写とはいえるのではないか。国家や社会のようなメタな次元でなくとも、そもそも人対人で軋轢は生じる。そんな不都合な当たり前を、爽快に歌っていると私は解釈している。

伊藤祐楓

君かへす朝の舗石（しきいし）さくさくと雪よ林檎の香のごとくふれ

北原白秋『桐の花』

バックグラウンドは横において置き、ここでは白秋の天才芸について触れたいと思う。今では雪の上を歩く時にサクサクというオノマトペはむしろ一般的とも言えるが、当時は斬新であったろう。そこから林檎の食感、サクサクへと感覚がつながる。そして、それが林檎の嗅覚へつながり、最終的に雪へ戻って歌は終わる。なんとセンスが良い歌なのだろう。北原白秋の歌心が大好きだ。

韓国と日本どっちが好きですか聞きくるあなたが好きだと答える

カン・ハンナ『まだまだです』

韓国の歌人にしか詠めない歌だ。カンは日本が大好きで日本にやって来た。そして千年以上の歴史がある和歌・短歌に魅せられ、人気歌人となった。母国である韓国が嫌いであるはずがない。「韓国と日本どっちが好きですか」の問いには、「両方とも好きです」でも全く問題はない。むしろそんな質問をしてくる人を面倒くさいと思ってもいいところだ。そこを、「あなたが好きだ」と答えるカン・ハンナが大好きだ。

〈三沢左右〉

かりそめにこの世にありて何とせう　立つたまま夢を見てゐる箒

永井陽子『てまり唄』

かりそめにこの世にあるという観念。ふとしたときに脳裏をよぎるけれども、つかみどころがなかった観念。この一首は、そんな観念に「箒」という形を与えてくれました。ことあるごとに思い出してしまう…どころか、ことあるごとに自分が箒になってしまっているような気にさせられてしまう。自分の中に浮き沈みする思想の一部を、固く重たい岩盤に縛り付けるような、まさに呪縛の力を持つ歌。そんな一首です。

時により過ぐれば民（たみ）の嘆きなり八大龍王雨（はちだいりゅうわう）やめたまへ

源実朝『金槐和歌集』

夭逝の鎌倉将軍の歌。「龍」の文化に関する本を読んだときなど、この一首が始終頭から離れませんでした。「八大龍王」という、和歌に似つかわしくない漢語の響きが投げ込まれ、上の句のスケールの大きさも相まって堂々たる趣き。そのくせ愛唱性が高く、現代に生きる私も大雨が降るたびに唱えてしまう。いや、カンカン照りの日でさえ、「八大龍王いざ雨たまへ」などと浅はかなアレンジで口に出してしまいます。

松井恵子

ドアに鍵強くさしこむこの深さ人ならば死に至るふかさか

光森裕樹『鈴を産むひばり』

短歌を読みはじめたころに出くわし驚き、忘れられない一首。恐ろしさより気持ちよさに似たものを感じたのは、歌の完成度の高さによるのだろう。（上の句と下の句ってこんなふうに使えるのかあ、真似できそう！）なんて思ったができなかった。内容ではないところに歌の魅力の核がある。深く吸ってゆっくりと吐く呼吸のようなもの。

マントのように子が使いいしバスタオルまだ残りおり体を拭う

吉川宏志『石蓮花』

目の前で今バスタオルを使っているこの子も、そうだいなくなるのだ。そんなタイミングでこの歌に出会った。子どもに使われるバスタオルはいつも楽しそうで、「まだ残りおり」の日を思うと切ない。まだ残っているのは作者自身でもあり、自分で自分を拭うように「体を拭う」のかもしれない。下の句の音韻のおもさが風呂場の湿度を伴ってくる。

〈松井竜也〉

振り向けばずしりと重き服役の十四万二千九百時間

郷隼人『LONESOME 隼人』

アメリカの獄中歌人、郷隼人。彼の歌集を読んだ時、僕は彼と同じくアメリカ・カリフォルニア州にいた。海外で暮らすことに疲れ、貧困に疲れ、漠然とした孤独に疲れていた僕は、彼の歌集を食い入るように読んだ。終身刑で獄中にあっても短歌は人に幾ばくかの自由を与えてくれるのだと思った。それ以来、言葉を大切にしようと心がけるようになった。頭にこびりついてはなれないトラウマのような一首。

瓦斯燈を流砂のほとりに植えていき、そうだね、そこを街と呼ぼうか

千種創一『砂丘律』

街を一から作ることだってできる、なんて考えたこともなかった。しかも砂漠に。まずはその衝撃。そして下の句がそこに生きる人たちの自由な世界感に対する衝撃。子供の頃に繰り返し読んだ中東の写真集を鮮明に思い出した。

僕は中東に行ったことはない。自分の生きたことのない世界に強く憧れるのは僕の幼児性が抜けきれていないからだろうか。中東関連のニュースを見る度に思い出す歌。

型を揺さぶる

小島 なお

角川『短歌』四月号の連載エッセイ「時代はいま」に書かれた堂園昌彦の文章「作者と定型の融和について」を読んでから、あらためて定型について考えている。堂園は吉本隆明『写生の物語』（二〇〇〇年、講談社）や穂村弘『短歌の友人』（二〇〇七年、河出書房新社）の論を引用しつつ、このようにまとめる。

作者と定型の融和、あるいは癒着の問題を突かなければ、どんな新しい「時代」や「テーマ」を詠もうとも、それは定型における単なるバリエーションの問題として扱われ、害のないものに転化させられてしまう怖れがある。

言い換えると、何を詠ったところで結局は穂村のいう「生のかけがえのなさ」という短歌のたったひとつのテーマへ収れんしてゆくのであれば、むしろ定型という型へアプローチしてゆく方が有効だと。

定型へのあたらしいアプローチでは真っさきに初谷むい『花は泡、そこにいたって会いたいよ』を思い浮かべる。

カーテンがふくらむ二次性徴みたい　あ　願えば春は永遠なのか

作者の韻律感覚については山田航が解説に詳しく書いているのでそれを参照してほしいが、定型を揺さぶりながらも自由律ではなくやはり定型だと思わせるリズムが確かにある。一冊から発せられる清冽なポップさは型のなかを言葉が泳ぎ回るような自在さにあるとたしかに思う。この歌集は二〇一八年刊行だが、この三年のあいだに個性的な韻律感覚を持った短歌がぞくぞくと登場している印象を抱く。

そのなかでも北山あさひ『崖にて』と谷川由里子『サワーマッシュ』から引用してみたい。

して、自由にして、お前は　噴水はまっすぐ上がりとてもいい子

紫陽花のひとつひとつが夏の脳　考えて、答えを考えて

北山の二首は両親の離婚に際した作。父と母のどちらに付いてゆくか子である北山に判断が委ねられたらしい。親としては優しさだったのかもしれないけれど、どちらかを選んでもいいということは、どちらかを選ばなくてもいいということになる。一首目では上句、二首目では下句の韻律に心が喉につかえるような息苦しさが表出する。

夜をめぐるモノレールいつみてもピークいまこそがピーク進んでいくよ

谷川の歌は、いっそうリズム重視だ。外来語の軽やかなひびきと、長音の伸びてゆくすずしさに快感が走る。「いつみても」「いまこそが」の語がスプリングボードのように働き、疾走感を演出している。

韻律面からの試みは、前衛短歌の時代にも遡ることができる。しかし口語短歌が成熟を迎えつつある今、文体と韻律とのあらたな融合がまた違うかたちで更新されるのかもしれない。

四方八方興味津々

田中泉

近所の大仙公園。七年前に堺市に越してきてから、数えきれないほど訪れた。その中でも特に心惹かれる一角。アイルランドでは円形の砦に妖精が棲んでいるという。そんなことも想像させるこの広場で憩い、遊び、癒され、なじみの薄い土地で始めた育児もずいぶん助けられた。ありがとう。

松井恵子

先日、夜中に夫と夜逃げでもするかのようにソファーを捨てた。ゴミ捨て場に置いたソファーに座るとそこはとてもよい場所で、ああそうだ、こうして生きてきたんだと思った。そうしているうちに子どもたち二人も起き出してきてわたしたちに加わった。上の子に抱っこされてきた下の子の裸足をあたためながら、このソファーに寝起きした友人のことや野良猫のことを話した。

夏は来ぬ
闇浮まるごとふきとばす
神の鼻息たのしからずや
坂井修一『古酒騒乱』
UTA GALLERY
三沢左右

灯(ひ)をさせばたちまち闇は明(あか)りけり黒ばらと見しは紅(くれなゐ)のばら
岡本かの子『浴身』

山田 恵里

藤棚

中庭の藤棚あたり　さうここの春がいちばん糖度が高い

月光に濡れるみたいにむらさきの陽に濡れて見る藤の花房

藤の花抱くやうに吸ふ虻ひとつ半音階づつ上つてゆけり

しつとりと肌（はだへ）のごとし我が髪を選んで降りてくれた花びら

気の強い女ですから発泡トレイ無しで私をつつんでください

クレペリン氏でなく忘れん坊のためトキトキ鉛筆用意する朝

足し算で測れはしない性格は右手の腹に敷いたハンカチ

とろとろと小さき心臓煮るごとく鍋のいちごは従順になる

恋のごと冷えれば甘み失せてゆくどこから見ても真つ赤なジャムの

膝を抱く小さい人が玄関のくたりと座るかばんのなかに

怒るには体力が要る許すには揚力が要る来週までの

いつか来た春がまた来てベランダのあなたのシャツの前傾姿勢

河合 育子

ハッカ飴

まだ耳はあたたかなまま友のこゑそして言葉ののこる花の夜

入り口の芝生といくら叱つてもしげるオヒシバ事務所の春だ

さまさまなさへづり、いいえ内線電話（ないせん）と外線電話（ぐわいせん）三つ鳴り出す事務所

ハッカ飴舐めたるあとの口の中なんだかさみしゆりかもめゆく

ひびき合ふ言葉が連れてくる昭和〈べつかふ飴〉と〈月光仮面〉

コロナつて太陽大気だつたつけアンドロメダより遠いあのころ

とめどなく花粉とぶ春かゆき眼よ虻の羽音が熱く泡だつ

白蝶のひそやかな死もちる花もすべてがあかるすぎる春だよ

ドルフィンがデルフィニウムの名のもとと教はりし日の空の波おと

詰め替へのシャンプー注ぐもどかしさひとしづくづつ辛抱溜まる

もうやめと思へど指はおのづからいきいきつまむ次のそら豆

ほつほつとそら豆食めばほの甘くぽくぽく噛めば夏が近づく

久保田 智栄子

まどを磨けば

家中(うちちゅう)のまどを磨けば浮くかしら　気球ゆつくりすすみゆく朝

手放したとたんにひかりかがやくよ空いつぱいの翼雲たち

われ褒めのために作りしお赤飯慣れぬことにて小豆がかたい

縮緬(ちりめん)の銀紙いいえくしやくしやのサランラップを被せた海面

愛情をうつかりもらつたばつかりにさくら斜めに切るごとく降る

本心をそつと聞かせてほしかつた泥んこだらけの両耳だけど

「さきに着いてみんなを待ってるだけでした」雲映しゐる春の潮溜まり

ひな人形しまひてさむき窓の辺にきのふ拾ひ来し貝殻を置く

「訣別はできないのです」会所にて軸の人麿ななめに笑ふ

ゆりの花粉手の甲につくバンドエイドはがしたやうな黄色をのこし

毎食後みがく前歯のうらがはの縦たて横よこ黄菊白菊

「明るい歌詠めないから」と離れゆきし友に一生勝てないわたし

有川 知津子

よいといふのに

ドアノブの消えし扉をまたひとつ開きゆきたり羽根をかざして

闇船の出船入船（でふねいりふね）記されず引揚援護記録年表

引き揚げの船より下りし十八の祖母に博多の空しろかりき

さうやつて歩みをかへす風ばかりはなびらはつひにわれをつつまず

祖母の七回忌

いくへもの波に運ばれゐたりけり六年まへのあの日のごとく

ひつそりと島へもどりて正坐する祖母の供養の二時間ほどを

しんぶんはいまなほ届くその日まで祖母の読みゐし長崎新聞

たわいない伝承ひとつ　ふくろふは男親似のをみなごに棲む

造幣局へつづく闇とはおもはねど戸袋のふちのしろきはなびら

高くとほく放れば空になるでせうイヴ・クラインの青き人体

いつまでも赤いくるまはとどまりぬ見送らなくてよいといふのに

とほあさのすなはまおほふさざなみと砂の上なるさざなみの影

大松 達知

あたりめ

ルワンダの実(まめ)の香りが訂(なお)しゆくつかてれ孝えなれいら必

ティーバッグわずかにゆれて〈回天〉に撃(や)られるまえのわれのごとしも

フランシス・ピカビアにある中黒(ナカグロ)がきょうのわたしの鳩尾に来た

〈干して焼いただけのあたりめ〉そのまえにしずかに閉じたひとつのいのち

おやゆびの腹で画鋲を捺していたぼくは壁ではないとわかった

いつからか妻は実家を家(うち)と呼ばず帰ると言わず行くと言うなり

豚肉、とざっくり書いてある肉の肉でなかった日々を想えり

ああ考(ちち)はひとたびもコロナウイルスと見ざり聞かざり言わざり、無念

癒すべきこころの疵のありやなしや〈三岳(みたけ)〉は夜のからだを捜す

このひとはオリンピックパラリンピックとかならず言う他にはだれもいないときでも

〈無人レジ〉前には人のぼくがいる買いたいものは買えるものばかり

ＺＯＺＯマリンスタジアム。

〈労働〉を三時間ほど見ていたり　私服になって選手が帰る

真島 陽子

天狗風

退任のあいさつはなぜなかったかコーチが野菜の苗を見ている

ぞくぞくと新型ウイルス改札を抜けて街へと働きに行く

目元までマスク引き上げ以前より目つきするどく本音言いおり

ものわかり良き返事して笑う目が部下の提案うやむやにする

カロリーゼロ、アルコールゼロ、糖質ゼロ　生きていけるかポジティブならば

ほろ酔いの義父が目をあけ語り出す俳優田中邦衛の訃報

予防接種受けんと予約をとる義母の電話もたもたもたもたつづく

めんどうは妻に任せて他人事のように涼しき表情の人

青空の窓のすきまを熊蜂がするりと入り込む昼休み

畝にたつ唐菜切る夕　天狗風大地ゆらして駆け抜けてゆく

可視化した飛沫がスローモーションでとぶ映像は土に還らず

すずらんの若葉の筒のうちがわに白き火種の光の環あり

伊田 史織

透きとほる

三月の桜蘂降るざわめきに街の烏は鳴きあやまりぬ

街灯の明るさにふとあふぎたり並木途切るる冥さぬけきし

桜蘂さくりさくりと三月のsacrificeめきて重くなる足

洗濯のコットンシャツに何処からか染めぬくやうな春の花びら

フォーレにはない〈怒りの日〉くれなゐに桜蘂降り三月終はる

オルゴールのねぢに紡がれ春霖の音の止まずや　愁ひのやまず

沙羅の枝の奪ひあふ空そこひにし水は降りて喉鳴るなり

シャコンヌを繰りかへし聴く一部屋の一隅に差す五月のひかり

木管の響きに耳をそばだてれば青葉のさきの空の澄みきる

黒蝶のひらききつたる深更の闇の階調ほのぼのと浮く

掬ふよりこぼるる水の透きとほるあをき血管あをき夏山

笹の葉のさやさやさやぐ古家に面影顕てば凪ぐもののある

月下 桜

春の花庭

ひとひらの桜はなびら公園の朝の砂場のくぼみにたまる

逆光にたわめる八重の桜花　時経し花はすこしうすいろ

はんみょうを草に見つけてはんみょうがゆくまでを見き春の花庭

ヘルパーにアリアッサムと告げながら忘れてなかった我に驚く

あれはビオラ、あれはパンジー　大きさが微妙にちがう花見比べて

花首を支えられつつ咲いている八重チューリップの底みえざりき

細草の尖端に蜆蝶とまる　一本の花のようにみていた

うすずみの広がる雲にしろい雲　東へながれるその白い雲

口元は意識しないと笑わない　かるがもみたいに笑っていたい

ひたすらに臥したる日々を思えども夢よりはかなくおぼろげである

うごけない日々がまた来て眠るのみ　うごけるときにトイレに行って

うごけないときはまったくうごけない　うごけるときまでひたすら眠る

★★ COCOON歌合 ★★

判者 有川 知津子

題：「腹」

片岡 絢 × 伊藤 祐楓

柔らかなきみのお腹にぼくの耳押しあててその宇宙を聴いた

左の歌。きみのお腹に耳を「押し」あてる。単にあてるのではない。「押し」の語がお腹の感触を喚起する。結句への飛躍に類型をみるものの、ぼくの幸福感が定型にここちよくのっている。右の歌。初句は口から出た言葉、以下は胸中の言葉と読み、作りの工夫を楽しんだ。ただ、注文時の感慨の表白ならば、結句の「そこ」は「ここ」となるかなどと余計なことを考えさせるのが惜しい。よって、左を勝ちとする。

特盛りで。腹など減っていやしないただ少しでもそこにいたくて

WIN!

題：「背」

真島 陽子 × 三沢 左右

少年は布ひろげたるやうな背を盛り上がらせてレーンを泳ぐ

左の歌。否と言えない状況を包丁の背に託している。刃向きはいつ変わるとも知れない。「とつとつ」のオノマトペも不気味だ。個人の出来事を詠み、今の世相を浮き彫りにする。右の歌。バタフライだろうか、泳ぐ少年の背に注目する。広げた布の比喩は、少年特有の健やかな背のそれとして魅力的である。ただ、第四句は厳密にあろうとして、かえってイメージの伝達が滞るようだ。よって、左を勝ちとする。

とつとつと包丁の背でたたかれて急な異動をうけいれる　春

WIN!

エッセイ

早川 晃央

エッセイと聞いてまず思い浮かぶのは、大学一年の春先のこと。私は教員免許を取得するため、人より多く単位を取る必要があった。多くの友達が週末へと入っていく金曜六限・十八時に始まる授業が『声に出して読みたい日本語』等で当時多くのテレビ番組に出演していた斎藤孝先生の教育基礎論だった。

斎藤先生は九十分間、とにかく話し続けた。教職に関することはもちろん、大学生が読むべき本の話、自身の過去の話など多岐にわたった。印象に残っている話の一つが、「私のゼミでは、毎週必ずA4・一枚のエッセイを提出して、お互いにコメントし合います。」という話だった。その意図は、教員になったらたくさんの話題の引き出しをもっておいた方がよいこと、生徒が提出するものの中で、優れたものはもちろん、そうでないものであっても良い部分を見つけてコメントしなければいけない場面があるため、その練習をしておくことだった。その時は、意図は分かるけど毎週一枚書くってすごいなーくらいにしか思っていなかった。

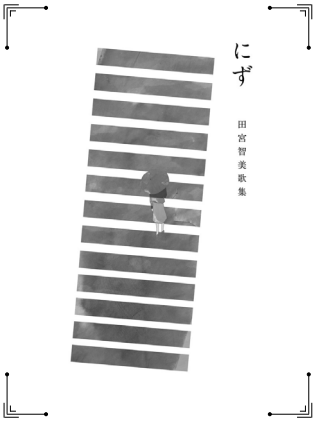
大学三年の春。斎藤ゼミは最もハードと聞いていたが、本格的に教職に就くことを考えていた私は迷わず斎藤ゼミを希望した。

案の定、毎週全員がエッセイを出すことを求められた。内容は自由。読書や旅行の記録、先輩におごってもらった話、最近考えていることなど本当に自由だった。その中で斎藤先生が示したことは一つ。偉人の名言や本からの引用と自分の体験を合わせて書くことで、説得力が増すということは何度も伝えられた。それゆえ、私たちは競うように、毎週名言を探していた。ドストエフスキーやニーチェを引用して書いてきた人がいた時は、場が盛り上がった。

エッセイを書くことはほとんどなくなった。しかし、教員はしばしば文章を求められる。学級通信、学年だよりのコメント、クラス紹介の文章など挙げればきりが無い。そんな時は、今も大学時代から書いている〈名言ノート〉から引用することを欠かさず続けている。

歌集 in the news

中村 恵



田宮 智美歌集

『にず』

（現代短歌社）

さようならわたしの願いごと

しあわせな歌が詠みたい誰からも全然ほめられなくていいから

切実な希求をストレートに詠んだ歌に惹かれた。不幸せで歌がほめられるのと、幸せで歌がほめられないのと、どっちがいいだろう。

作者は一九八〇年山形県生まれ。一九九九年より宮城県に暮らす。震災が起き、今ある状態とあるべき姿の間に乖離を感じ、苦しんでいる。

震災が起きなかったら、震災が起きなかったら、呪文のように

いつまでも仮住まいなるこの部屋でいつか誰かと鍋をつついた

「仮住まい」なのは仮設住宅やアパートの部屋など場所のことでありながら、同時に、あるべき姿から見て、今は仮の状態なのだと感じているのだろう。今の状態は、作者にとってずっとこのままでいたいと思えるようなものではない。

こんなはずじゃなかった今を生きているただ生きているまた朝がくる

嘔吐して早退したるバスの中お年寄りに席をゆずってしまう

嘆きを直球で言葉にしていて胸を衝く。ここにあるべき姿と「今」との対比がくっきり読み取れる。だからといって不貞腐れているわけではない。親切で善良

な人物なのに、なかなかあるべき姿になれない。
まもるものもなくまもられるものでもなくただ過ぎるのを待つ震度4
「もの」は、「物」であり「者」なのだろう。特に執着する物も人もなく、ただ揺れが収まるのを「待つ」。地震に対してだけだろうか、いやその他の事象に対しても、守らず守られず、待っているように見える。
戸の中のおとうとを持つ姉であることをいつまで黙っていよう
産み終えしのちのいもうとの饒舌なメール、キラキラネーム名付けて
お雛さま、お内裏さまだけ飾ったと母のメールのピンボケ写真
「戸の中の」弟の存在を黙っているのは、重く旧弊な固定観念ゆえだろう。妹はレールに乗って一種のあるべき姿になった人物で、作者とキャラがかけ離れている。作者の寂しさに寄り添わない。母がピンボケしているのは写真だけではなくて、おそらく願いの内容もなのだろう。雛人形に込められた、嫁いで一人前の女性になってほしいという願いは、結婚のあてもなく生活するのがやっとという作者の状況とは程遠いところにある。母の時代に当たり前だったこと、母の価値観のようにはいかず、もどかしい。
くり返し「寂しい人生だ」とつぶやけば祖母に「楽しい」と訂正される
虹、虹と幾たび言えど通じぬを「にず」でようやく伝わる、祖母に
「寂しい人生だ」が口癖のようになっている作者。それに対し、祖母は「楽しい」と訂正をする。何度も。この時、作者と祖母の意見は平行で交わらない。というのも、祖母は作者の人生を楽しい人生だと本当に思っているからである。祖母は自身の体験を振り返っているのかもしれない。その上で作者の今の人生を肯定しているのだ。
忘れるという復興もありましょう　わたしは忘れ生きてゆきます
わたしのが割れれば君に使ってた青い茶碗へご飯をよそう
恋人と別れ、以前のように独りの状態かもしれないが、お別れを経験しなかった時よりタフになったように見える。ごはんも食べる。
御守りをどんと祭の火にくべて、さようならわたしの願いごと
多くの人にとって当たり前のあるべき姿を震災で失って、今の状態は仮だと思っていた作者が、御守りに込めた願いに別れを告げる。この願いとは、あるべき姿になりたい、「しあわせな歌が詠みたい」という希求である。「祖母に『楽しい』と訂正され」たことの意味が、このころ作者に響いたのではないか。そして自己肯定の気持ちは作者の中にも生まれた。だからこの歌集は『にず』なのだろう。
あるべき姿に戻すことではなく、忘れて肯定感のもとに構築することが、作者の復興の方法、幸せになる方法である。火にくべて鮮やかに願いごとを手放す。

水上芙季

四百円の焼鮭弁当この賞味期限の内に死ぬんだ父は

藤島秀憲『すずめ』

この歌集が出版されてすぐ、短歌の仲間数人で読書会をした。それぞれ好きな歌十首を挙げたのだが、私以外全員この歌を挙げた。私は秀歌とわかっていながら挙げなかった。肉親の死を弁当の賞味期限と対比していることがあまりに悲しすぎたのだ。「この歌の良さがわからないの？」と聞かれたあの時からずっとこの歌が気になっている。この歌に込められた哀しみ、やるせなさ、凄味はあの時より、さらに心に沁みている。

遠い春湖（うみ）に沈みしみづからに祭りの笛を吹いて逢ひにゆく

斎藤史『魚歌』

〈創作短歌〉という短大の授業で使っていた、高野公彦編『現代の短歌』でこの歌を知った。〈遠い春〉とあるので十代のころか。年齢特有の自己否定、死への憧れを感じる。そして今の〈私〉が祭りの笛を吹いて逢いに行くという不思議な歌だ。繊細で陰鬱な上句から、陽気で動的な下句へと転換するところに惹かれる。謎めいた妖しさと明るさ、韻律の美しさがずっと心に残り、気になる歌である。

片岡絢

サラリーマン向きではないと思ひをりみーんな思ひをり赤い月見て

田村元『北二十二条西七丁目』

仕事帰りの道、ようやく解放された身を夜風に晒しながら、月を見上げる。今日も疲れたなあ。そもそも自分は本当はサラリーマン向きじゃないんだよなあ。でも生活があるしなあ。そんな諦観を浮かべたいくつもの目は、同じひとつの月を見る。この夜、同じ思いでいるのはきっと自分だけじゃない、ということは安らぎである。「みーんな」という間延びした言葉により余分な力は抜け、「赤い月」に詩情がある。

年々にわが悲しみは深くしていよよ華やぐいのちなりけり

岡本かの子『老妓抄』

短編小説『老妓抄』の末尾に、女主人公である老妓が作った歌として置かれている。かの子自身も波乱に満ちた人生であった。しかし、望んで波乱になったわけではないだろう。物事は次々と起きる。その否応の無さのなか、自分自身を俯瞰しているかの子がいる。心の奥深くの非常に静かな場所にて、波乱上等、それこそが人生なのだと、自分を慰め、奮い立たせるためにつぶやいているように聞こえてくる。

中村恵

椰子の葉と象の耳ほどこの星の風が愛したかたちはなかつた

井辻朱美『水晶散歩』

まだ短歌を詠むことのなかったころ、この歌に触れて短歌というものにとても惹かれた。椰子の葉と対になった象の耳がばらんと動くのが浮かんだ。耳の裾の方の薄い部分は風にはためいている気がした。そしてそれが「この星の風が」と空から見ているような視点で、「なかつた」と過去のことのように語られている。もう地球は滅んでしまった後なのかもしれない。語っているのは神のようなメタ視点。こんなことが可能なのかと驚いた。

わたしには死んでいる父　手加減をしながら心臓マッサージする

藤島秀憲『すずめ』

「十二月二十七日午前七時二十九分　救急車要請」と詞書がある。おそらく胸骨圧迫をするよう、119から指示されたのではないか。作者は父の体を案じて、圧す力を手加減した。長く病んでいた軽く脆い父の体を壊さないくらいの、マッサージと呼べるほどの優しさを刻む。上の句の表現には少し驚いたが、「生きていた父」になら激しく揺さぶるような圧迫をしたはず。父の死後も続いている、複雑で深い愛情を感じる。

杉本なお

自転車の錆びたチェーンを替えたくて兎を全部売ったさ　ごめん

佐久間章孔『洲崎パラダイス・他』

飼っていた兎を売り、そのお金で自転車のチェーンを買った作者。まだ少年の頃だろうか。当時、作者は戦後の村で暮らしていた。新しい自転車を買ってもらえる状況ではないことを理解していた作者は、おそらく無断で兎を売り払ったのだと思う。その時代のことを詳しく知っているわけではないが、とにかく下の句に惹かれた。この歌を思い出す度に、錆びた鉄や古い油の匂い、土と少年の体臭がどこからか漂ってくるような気がしている。

ほそき脚たたみて眠りゆくものをかくまひて夜の草は鳴りゐむ

横山未来子『樹下のひとりの眠りのために』

この歌を初めて読んだ時、この作者は妖精の目を持っているのではないかと思った。ほそき脚を持つものというのは虫たちのことだろう。わずかに湿った夜風。草に守られながら眠る虫たち。虫たちの背中をそっと撫でている草の葉。草の葉が擦れあうときのかすかな音はなんて優しい音楽だろうか。自然の中の小さな営みを詠んでいるようでいて、広く深い世界を感じる。いつの間にかあまり虫が怖くなくなった。

〈礒川朋美〉

生きのこる文鳥のためあたたかき陽は少しづつ部屋にさしこむ

純多摩良樹『死に至る罪』

作者は昭和四十三年横須賀線電車爆破事件の犯人。一人死亡、三十人負傷させ、昭和五十年に処刑される直前に詠んだとされる。独房で飼うことを許された文鳥。文鳥は生き残るが自分は間もなく処刑される。陽は同じように自分にも当たるはずだが、罪の意識がそれを許さない。『潮音』に属し歌歴五年。技巧のない真っ直ぐな歌いぶりが生と死、罪と贖罪、生命や畏怖の心をストレートに表し、読む者の心をも真っ直ぐに打つ。

をとめらはエレベータに口噤(つぐ)みアスパラガスの束のごとしも

篠弘『濃密な都市』

コロナを警戒し喋らないのではない。恥じらいや自意識の為に喋らないのだ。この歌が詠まれてから凡そ三十年。男性目線でこのように女性を捉えた歌は現代では詠まれないだろう。「をとめら」と「エレベータ」で乗り合わせた男性が「アスパラガスみたいだな」と女性を歌ったら、ジェンダーフリーの進行する現代では、非難されるかもしれない。障害や差異も歌の種だが、ことジェンダーに関しては歌と深い関係があるだけに難しい。

〈斎藤美衣〉

恥さらす外出ならむしろたへのズックの靴の紺のイルカよ

小中英之『翼鏡』

難解な言葉はないのに、何度も読み返してもつかめるようでつかめず、それでいて不思議と心惹かれる。何の用事で外出するのだろう。どうして外出が恥をさらすことになるのだろう。重々しい上の句と、明るく爽やかな下の句の対比が鮮やかだ。

象徴的な紺のイルカは実際にズックに描かれている模様なのか、イメージなのか。内と外、明と暗を感じさせ、普遍的な魅力を湛えた歌だ。

砂浜を歩き海から目に届く光のためにおじぎを交わす

堂園昌彦『やがて秋茄子へと到る』

かつて水上芙季さんに「『やがて秋茄子へと到る』を読むと嫌な気持ちがする」と言ったことがあって、その言葉足らずを未だに後悔している。もっと丁寧に言語化すると、「わかりたい気持ちがいつも上滑りして、言葉をとらえきれず残念だ」になる。

激しい感情や出来事はなくて、歌の中の人たちはどこか達観していて静かだ。現実の世界とずれたパラレルワールドの中のような手触りの歌には、不思議な中毒性がある。

白川ユウコ

くれなゐの二尺伸びたる薔薇（ばら）の芽の針やはらかに春雨の降る

正岡子規『竹乃里歌』

意味がわからなかった。なぜこのような教訓もメッセージ性もないものが教科書に載っているのだ。違和感しかなかった中学一年生。短歌ってこんなにつまらないことを詠むものなのだろうか…と思いながらもはっきりと暗唱できたこの一首。春の雨のなまめかしさ、くれなゐの薔薇の芽の針の官能性はやはらかに、確実に女子中学生のこころに刺さり、いまもなお抜けずにある。

自分より手の冷えているアイドルを探し出す為行く握手会

もきち「オザワマキ痛」vol.174.2003.20

もきちというのは本名。一九七二年生まれ、職業は重要無形文化財・伊勢大神楽の神楽師。私が二〇歳のときに知り合い、誕生日が同じ五月三〇日とわかり意気投合。バンドやお笑いや演劇やアイドルのライブに行ったり、怪談のサイトで遊んだり、A4の手書きをコンビニコピーしたフリーペーパーを仲間内で交換したりのわが盟友。これはもきちくんの ペーパー「オザワマキ痛」vol.174.2003.20より。実家にて無事発掘。

〈柴田佳美〉

眼もて追ふいささざざ波ひろがりて見よ内海はすべてさざ波

窪田空穂『冬日ざし』

ゆったりとした言葉の運びと韻律が印象的。さざ波以外の事物をそぎ落とした海は、こんなに鮮明で力強さをたたえている。わたしの胸の中に住みつき、折に触れて思いだす。作者はとことんさざ波を見つめ、心は海全体へ向いている気配がする。単純化をしているが、決して内容が希薄なものではない。海の広さが見事に表現され、読む者をひきつける。海の断片であるさざ波から全体を感じ、作者が見ている瞬間から永劫を感じる。

しらまゆみ春の海辺に遊びたりときをり君に敬語つかひて

栗木京子『しらまゆみ』

春の海辺には〈君〉と作者がいる。澄んだ広々とした空間がまわりの空気ごと描かれる。最初に読んだ際は、ときおり敬語を使うことで相手を大切に思う気持ちを〈君〉に伝えているのだと解釈をした。しかし初読から十年ほど経ち、今では次のように思う。自然に敬語を使いたくなるような、日常の中でも尊敬の念が湧く〈君〉なのだと。内面をやわらかく風景にかぶせたような歌だ。その内面に何度も触れてみたくなる魅力がある。

小川和恵

ふなびとははやこぎいでよふきあれしよひのなごりのなほたかくとも

会津八一『昭和二十八年歌会始題詠』

高校にこの歌の碑があった。どうしても決勝トーナメントに進めなかった、青春の剣道場。体育祭の闇練習が終わると何人かの友人は男子から「送ってくよ」と言われ、私は「気をつけて帰れよ」と言われた、信濃川の橋の下。志望校判定でいいかげん自分の限界を知った高三の夏。やりたいことがいっぱいあって一日二十四時間じゃ足りないと思っていた学生時代。そして今も、何かあるといつもいつも私の心に浮かぶ、この歌。

形見とて何残すらむ春は花夏ほととぎす秋はもみぢ葉

良寛『良寛全集』

家を建てて十年。すっきりくらしたい。断捨離だ。いや捨てられない。明日こそは片付けよう。良寛様は本物のミニマリストだったと思う。手放せば手放すほど豊かになるって、身をもって教えてくださっている。強靭な精神とからだ。愛。知恵。その書も素晴らしい。惚れ惚れする。大好きだ。この歌はノーベル賞を受賞した川端康成が記念講演「美しい日本の私」で引用したほどに、ともかく人をひきつける。

〈田中泉〉

底つ貝さぐらばあらん触れがたし涙の中に住むまぼろしは

与謝野晶子『冬柏』第八巻第七号

歌集未収録作品。堺市「利晶の杜」の昨年の企画展「『冬柏』―『明星』の精神を貫いた理想郷―」に展示された自筆歌掛軸の歌。二年前に亡くなった夫・寛の面影と、夫の死を悲しむ心情の表現であると解釈されている。過去に寛への様々な想いを情熱的に詠んだ晶子を思えば、沈鬱さの深まる歌である。他方、求めても得られない「まぼろし」と共にある人の想いを具象化した普遍性も感じられ、掛軸の前に佇んで何度も読み返した。

中央線に揺られる少女の精神外傷（トラウマ）をバターのように溶かせ夕焼け

笹公人『念力家族』

同じく利晶の杜での企画展「笹公人作品展『念力歌ふぇ』」（二〇一六年）ではじめて触れた歌。笑いを誘う歌がいくつもある中で、この歌を目にした私―当時、育児に心が混乱することもしばしばあった―は、抱っこ紐のなかの娘とともに、夕焼けに包まれるような不思議な感覚をおぼえた。そして、短歌以外にも笹の多様な創作活動を伝える展示物を観ていったが、何となくその世界がこの一首に溶け込んでいるような印象を受けた。

大西 淳子

ビー玉

感情のガラス扉がバンッと割れ肋軟骨を痛めてしまう

縦に切るおおきイチゴの断面がキレイなあばら骨に見えくる

あまおうは真中に赤い炎あり食べて内側から火をつける

こんなにもやさしい波があんなにもこわい津波になった三月

たんぽぽはあらゆる冬の裂け目から黄色い炎ホッホッと吐けり

しあわせの同調圧力あるようでさくらさくらの春を怖れる

いちまいのそらに領空　スクランブル　白い炎が直線となる

どれくらい何が足りないわたくしかこむら返りの激震に覚む

大切にしまったはずのビー玉の青い炎は消えていないか

観測史上最も早く咲くさくら、つつじ、ふじ、バラ　ああ急がねば

しずかなる天の怒りの紫の炎のように揺れる大藤

忘れたいことほど忘れてはならず三月の海、八月の空

田中 泉

一階の部屋

棄てられぬ手紙、カードが収まれり〈王様のおやつ（グーテ・デ・ロワ）〉のうすき缶には

箸を使ひもの食べてゐる引越して段ボール箱のあはひに棲むも

茹であがつたパスタを笊にあげないで鍋に移したオリヴァーの手は

カリスマシェフ、ジェイミー・オリヴァーいくつもの店を閉ぢたりゆたけき街の

絵本を詰めた段ボール箱あけてみて　ふと読みはじむ「りんごが　ひとつ」

夢のなか段ボール箱を開けてゆく　どれかの箱にわたくしも居る

目を瞑り〈木のポーズ〉して雨音はさやかに聴こゆ一階の部屋

我と子が入れ替はりたり飛ばされた帽子を拾ひ被るあひだに

手の内でしをれた蝶に変はりゆく子がひろひたる白い躑躅は

ちぢみゆく春にかくれて妖精は片方の靴をつくりつづける

庭のない一階の部屋リキュールの小瓶に挿せり黄のガーベラを

隣室の人にまみえず越してきて十日たつ春のアパートメント

小川 和恵
字書き虫

爺ちやんは硯の箱をひきよせて筆を舐めなめ何か書いてた

爺ちやんに抱きあげられてそのたびにヒゲ痛かつた　抱いてあげたい

子を寮に送り届けし早春の雨ぽたぽたと我を濡らしぬ

何者にならむと思ふわけでなくただ書きたくて書きたくて書く

努力では手に入らないものばかり数へておとなになつたみたいね

白き紙日がな一日ながめゐて書かぬ紙こそまたうつくしき

とろけゆく墨を見てゐる　端渓の老坑水巖硯板の上

この筆もその筆もすこしちがふので今日は十本小筆を試す

命毛のいのちは長くただ一本　とりまきの毛は擦り切れはてぬ

紫の石に和墨のくくくくくとあたる嬉しさ巻紙を書く

情熱の持続そのことだけがいまわれらに与へられし能力

生き残る命毛ぴんと天を突きいつかのイタチの魂宿る

白川 ユウコ

イニシエーション

さみしいかさびしいなのか一音をたしかめたくてまた会いに来た

終点のしんじょはらから乗り継いでそこからはしりだすものがたり

黄昏の二人きりなる鈍行が本音の奥の本心へゆく

鍵盤に指を乗せれば音が鳴る確実なこと父のさびしさ

上野千鶴子『黄金郷』。

四文字を口に出すとき微風吹く　男のそれは　さ　び　し　い　なのか

鏡餅何度割ったかわかってる？　いつまでそこでいじけてんのよ

苛立てばスイカの種のサンプルの貯蔵庫に来てチルアウトする

気付いたら文房具屋はつぶれてて友のお腹はふくらんでいた

中学で圏外にいた男子だがああ背は伸びて飲み物くれて

わたしたちなにも成長しないのに髪の毛ばかり伸びるわよねえ

観にゆかば思春期死なんわれわれのイニシエーション、ネタバレはせじ

あたらしき映画ひとつを待つ年月ひとりひとりのネブカドネザル

礒川 朋美

ピン留め

水平を越えて漕ぎざま枝を蹴る子とブランコに降れる花びら

ゴム鞠のやうに反抗する君を空に放たば輝き出さむ

セキレイが道路横切り急ぐから我もつられて急ぐコンビニ

ちり紙のやうな昼間の月一つ我ら宇宙にピン留めされる

猫の背に春陽優しく広ごりて地球の半分今包まれてをり

相席は路地裏の猫水割りのビールあふれば通天閣

持つてると呑んぢまふから日に千円息子に貰ひに行くとふ御仁

何するか決めかねてゐる猫の尾の動き追ひつつ押すリダイヤル

万端に整へていく夕飯の帰宅をすれば食べたくもなし

スマホ消し「南無阿弥陀仏」と呟きて追試課題に取り組む中二

月だけが地球の最期見届ける我に最も近き友がら

みどり児は全宇宙たる母の手に命一つを預けて眠る

杉本 なお

春と蛙

まだ少し春が足りないやうな目の蛙が座る道のまんなか

口笛は諦めました片方の眉だけ上げる練習をする

いちめんがうすむらさきに咲く前にマツバウンランの浸蝕を摘む

廃線はひと雨ごとに朽ちゆけりゑのころぐさの穂を弾ませて

ここにゐる理由が心もとなくてバジルの鉢をひとつ増やせり

そのひとが新茶を淹れてくれるのを待つことはもうない、といふこと

遠い遠い記憶に燃えてゐるやうな焚き火の動画を眺めてゐたり

カーテンが風にふくらみだす午後は思はぬ方へ気持ちのなびく

揺れてゐるやうな気がした天秤の両腕はまだからつぽなのに

牛乳を電子レンジであたためるあたためすぎてあふれてしまふ

これも空の仕事のひとつイヤホンの隙間に春のかみなり聞こゆ

稲妻を撮りたくて待つ　窓越しにあなたの眠りを確かめたあと

中村 恵
主婦道初級

「困るかな？」晴れた日つづく夕暮れに湿った紙の包みをもらう

母ほどに重くはなくておばさんは去りぎわ尋ぬ糠はあるかと

白玉を一と四十八作る分け方教えてくれたおばさん

名にし負う筍の下拵えをひととおり読む　カラスが鳴いた

とぎ汁を正月用の深鍋に集めようやく収まる筍

一時間本を開いてしゅんしゅんと厨の端（は）まで四月の香り

桜井昌司『俺の上には空がある広い空が』

冤罪に二十九年を奪われて獄に見る空は足元から

冷めるまで一晩をおく　今日手術したおとうさん寝たころかしら

毛の生えた皮めくるその右の手の下の方食べられる気がする

やわらかく香る小さな可食部を白だしに煮る指で味見て

母さんのごはん食べたし甘えれば母はLINEに〈主婦道〉を言う

床にいて目蓋を屋根を雨雲を透かして広き青空を見る

片岡 絢

コーヒーラバー

霧雨のやうにさあつとわたくしを包みくるのがCoffee aroma

厨ぢゆう薫りひろがり真夜中のコーヒーラバーのお時間ざます

ちやうどよい頃合ひでまた朝は来て勤務時間は真空時間

婚姻は人界のこと　靄のなかモンシロチョウは視界より消ゆ

楊貴妃の眼差しのごと西方の空ゆるやかに夕焼けてをり

さびしさの陣地が広くなつてゆき愛するための準備はできる

鳥だけが鳥なんぢやない　蹴る地面、飛んでゐる空ごと鳥なんだ

数人が死ねばただちに孤児となる子と歩きをり地球の上を

子の〝ぼんのくぼ〟を眺める　振り返るころは笑顔のお母ちやんだよ

葉桜となるころはもう皿洗ふ両手を気持ちよく水はゆく

心臓を意識するのは危機のとき　ピアノの発表会なども危機

緑なす町々を抜け中央線高尾駅には天狗がゐたり

〈大西淳子〉

報復は神がし給ふと決めをれど日に幾たびも手をわが洗ふ

大西民子『花溢れゐき』

手を洗うという日常の行為と、報復は本来直結しないはずだ。それが「ど」の接続によって結び付いた時、手を洗う行為がとても恐ろしく思える。手を洗い憎しみをなんとか流そうとしているとも読めるし、この手で復讐してやると実行準備に入っているとも読める。これまでは、報復の心が湧くと、手を洗い収めてきたが、コロナ禍、文字通り日に幾度も手を洗うようになり、その度に、報復の心が湧いて困っている。

俺は詩人だバカヤローと怒鳴つて社を出でて行くことを夢想す

田村元『北二十二条西七丁目』

この歌に、どうしようもなく惹かれるのは、代弁者だからだと思う。通常、愛唱歌になりにくい破調だが、ことある毎にリピートするのは、心の叫びだからだろう。特に語順がよい。「夢でバカヤローと怒鳴った」では、そこまで強く響かない。初句、二句で実際の声が聞こえる。三句、四句でリアルな姿が見える。そして、結句で深く胸に収めるのだ。組織のなかの不条理は、時代や性別を超えて、有り続けるように思う。

馬を洗はば馬のたましひ冱ゆるまで人恋はば人あやむるこころ

塚本邦雄『感幻楽』

初句七音の破調にまず驚くが、馬を洗うという仮定にも驚く。従軍や馬術部などでなければ日常で馬を洗うことがないからだ。たましいがピカピカに冱えるまでこすられる馬も迷惑だろうが、馬の巨体であれば洗い甲斐もあるというものだ。一方で、人を恋する仮定は不思議ではないし、ストーカーが人をあやめてしまう事件もある。突き詰めてゆけば人のたましいをピカピカにせずにあやめてしまうのが不思議だ。

逆立ちしておまへがおれを眺めてた　たつた一度きりのあの夏のこと

河野裕子『森のやうに獣のやうに』

おまへもおれも男性を意味する。作者は女性。おれ、でなく我とかになるはずが、おれであることで物語めき、おれとおまへの関係性や場所などがほのめかされる感じがする。眺めてたという口語調も小説みたいだ。

たった一度きりなのは逆立ちしていたことなのか、夏なのか（あの夏はいつでも一度きりなのだが）。上句の不思議さが下句の不思議さをも納得させてしまう。

伊田史織

あの夏の数かぎりなきそしてまたたつた一つの表情をせよ

小野茂樹『羊雲離散』

そのときは気づかなかった、ということがある。それはいつも見る表情だったからであったり、些細な変化だったからであったり。私にみせる表情だから笑っていたわけではなく、やはりその人にとっても嬉しかったから笑っていたのに。そのことに気づかず、当然に感じて素通りしたような〈あの夏〉。今更というとき、どうしても伝えたい言葉はあり、数ある表情の中から、「あのとき」というたった一つが浮かぶ。

天（あめ）の海に雲の波立ち月の船星の林に漕ぎ隠る見ゆ

『柿本人麻呂歌集』

どこか懐かしい思いを古代の歌人と共にしたようだった。風のつよい空に月がでている、ただそれだけの風景の美しさが胸を打つ。私は夏より秋から冬にかけての夜空を思い浮かべた。だから雲は薄く、風が吹けば波立つように見える。鮮やかに星が瞬くのは空が澄む季節だ。ぽうっと光を放つ月。あたかも漕ぎだすように雲は流れる。現代とは異なる夜空のはずなのに既視感がある。歌人が伝えた景色は美しかった。

〈真島陽子〉

葛（クズ）の花　踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり

釈迢空『海やまのあひだ』

高校の国語の授業中に、教科書をパラパラとめくっていて、ふとこの歌を読んだ。葛の花の色を当時は知らなかったが、踏みしだかれた鮮やかな花のイメージと、ほんの僅かな時間差で人と人とが出会うか出会わないか…。「縁」というものの不思議さを宇宙の不思議さレベルで、この短歌から感じた。（短歌って、すごい！）授業中の先生の声が聞こえなくなる程、秘かに興奮して、忘れられない一首になっている。

母なるゆゑいのちの重さ知るべきか母なるものは人も殺（あや）めむ

米川千嘉子『一夏』

宮柊二記念館短歌大会で選者を務めていただいたのがご縁で、ＣＯＣＯＯＮの評論ページに米川論を歌かせていただいた。米川さんの歌は難しいと思いつつ、読み込んでみなければならない作品だと思わせる引力を感じたからだ。米川作品の「既成概念を疑う姿勢」に出会い、私の物の見方も変わらなくては、と思った。母＝愛情深い存在という既成概念に疑問をぶつけるこの作品は、読むほどに深くて怖くて魅力的な一首だ。

大松達知

城のごときものそそりたつ青年の内部、怒れる目より覗けば

塚本邦雄『日本人霊歌』

かつてゴチゴチでとっつきにくいと思っていた塚本邦雄の作品群。今読めばおおらかで穏やかに見える。それは内容は近代短歌的ではないけれど、描写がくっきりと、骨格がしっかりとしているからだろう。物体が一首の中心にあり、一瞬でひとつのイメージを伝える。それに比べて、塚本（二〇〇五年没）後の短歌は、のらりくらりとしすぎている。自戒を込めてときどきこの歌の強さを思い出す。

のどぼとけわれにもあるか怒りたるのちのかなしみに唾をのむとき

花山周子『林立』

感情はコントロールすべきもの、だとは思う。けれど、それでいいのかとも思う。アドラー心理学による〈怒り〉の分析は示唆的だ。まず一次感情として、寂しさ・悔しさ・辛さ・不安などがあり、それが二次感情の〈怒り〉として表面化するという。だから、自他の一次感情を把握するのが大切。この歌の状況でも、かなしみが取り残されているのだろう。感情は現代短歌の大きなテーマのひとつ。直視したい。

〈有川知津子〉

物の葉やあそぶ蜆蝶（しじみ）はすずしくてみなあはれなり風に逸（そ）れゆく

北原白秋『橡』

白秋の中で三番目に好きな歌です。実は、二番目に好きなのも一番目に好きなのもこの歌です。句切れが二つもあったり、「あはれ」などという印籠のような古語を使ったりもしています。それにもかかわらずです。歌会に出すと、句切れは一つに、と言われそうですし、「あはれ」を使わずに「あはれ」を表現する方向を探ってほしいとの声も聞こえそうです。ですが、読むほどにしみじみといいなあと思います。

生れ来てあまりきびしき世と思ふな母が手に持つ花花を見よ

斎藤史『魚歌』

歌を始めたばかりの頃、一年くらい入院した。入院支度をしているとき、コスモス長崎支部の先輩から、私の歌ノートを預からせてほしいというお話があった。後輩に欠詠させたくない思いからであったろう。「コスモス」には、その歌ノートから毎月十首が送られた。史のこの歌を知ったのは、こんな冬の季節である。手に握られた花花が揺れてまぶしくて、どうにも泣けてしようがなかった。あれから二十年余りが過ぎた。

久保田智栄子

君かへす朝の舗石（しきいし）さくさくと雪よ林檎の香のごとくふれ

北原白秋『桐の花』

中学生の頃、国語の教科書でこの歌を知った。雪と林檎の清冽さと愛らしさに惹かれ、「さくさく」という擬音語に親しみを覚えた。後朝の別れといった発想のなかった当時の私だが、なぜか結句の「ふれ」は、「降る」の命令形ではなく、「触れる」の連用形だと思い込んだ。誤った解釈だと知りつつ、君に触れる雪を羨むかすかな気持ちが白秋にあったのではないかと、実はいまだに感じている。

未知の庭はるかにありてわたくしの内臓に棲む鳥を置きたい

東直子『十階』

一読後、「おとうとよ忘るるなかれ天翔ける鳥たちおもき内臓もつを」（伊藤一彦『瞑鳥記』）が思い浮かび、衝撃を受けた。重い臓腑をたずさえて「天翔ける鳥たち」が、掲出歌の「わたくしの内臓」にそのままそっくり入ってしまったと感じたからだ。やがてその鳥たちは、はるか彼方の「未知の庭」へと飛び立ってゆくのであろう。本歌取りが最大限生かされた秀歌だと思う。

〈河合育子〉

足下の木の実を磨きひとつずつ野に戻すだれのためでもなくて

内山晶太『窓、その他』

この歌をコロナ禍の日々によく思い出す。

自然への従属願望、いのちへの慈しみ。木の実を磨く行為は誠実で慎ましい。野に戻すことで木の実は永遠のいのちに変わる。

読むたびに心の澱が濾過されていくのはなぜなのだろう。これからも読み返しながら、ずっと考えていきたい。

顔のない春のキャベツが売られたりそこに埋もれぬ私の顔も

前田康子『窓の匂い』

春のキャベツを手にした瞬間に通じ合えた気がした大好きな歌。

柔らかい春のキャベツの感触は、春のけだるくぼんやりした心もとない体感に通じる。そんな感覚を〈顔のない〉と表現したと読んだ。そして春のキャベツの感触と春の体感が一体化し、読者の感覚を起動する。

感覚が感覚を呼び起こし、豊かに連鎖していくのだ。

山田恵里

「煤」「スイス」「スターバックス」「すりガラス」「すぐむきになるきみがすきです」

やすたけまり（ブログ「すぎな野原をあるいてゆけば」より）

ある時、廊下で行き合った男子生徒が私の顔を見るなり、この短歌を暗唱した。一年ほど前に授業で短歌を作らせた時に紹介した歌の中のこの一首が、よほど印象的だったらしい。しりとりの「る攻め」ならぬ「す攻め（しかも両者で）」の台詞だけで、二人の関係を描き出している。短歌には全く興味のなかった体育会系男子高校生のハートを鷲掴みにしてしまう魅力を持つ、なんとも凄い一首なのである。

初霜を「ゆき」とよろこびしゃがむ子を引っこ抜くごと保育園まで

岩下静香『ナチュラルボイス』

新しい体験に興奮する子どもに、ゆったりとつきあってやりたい。親なら当然のそんな気持ちは、出勤時刻や帰宅後の家事の嵐にしばしば粉砕される。子どもの低い目線には発見がたくさんある。しゃがみこんでしまう子どもを、私も何度引っこ抜いたことか。この「引っこ抜くごと」という表現があまりにも絶妙で、一読以来頭を離れない。今では甘やかに胸を温めている、幼子を抱えてがむしゃらに働いた日々の記憶が呼び覚まされる。

白川昆虫館

SHIRAKAWA INSECT MUSEUM

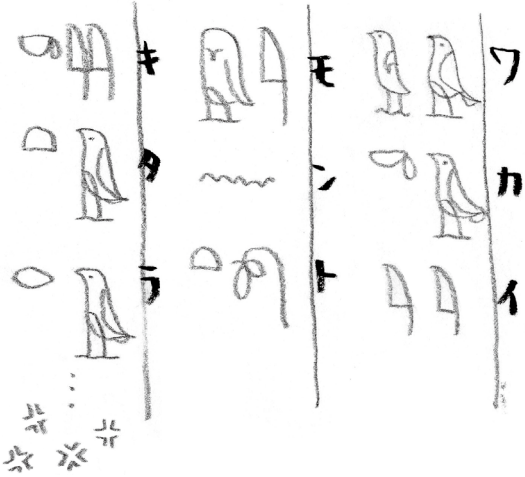
● 白川 ユウコ ●

最近の若者はなっとらんという文句はヒエログリフにもあるとかないとか聞くが最近のクマゼミはなっとらん。頭の悪いセミの条件 ①夜の電灯に反応。アブラゼミやツクツクホウシは蛍光灯の光で鳴きだし、ヒトの気配に敏感なミンミンゼミも街灯にとまる。②樹木以外のものにとまる。電柱や民家やビルの外壁で鳴くアブラゼミはおろかに見えたものだ。クマゼミは決してそんなことはせず、捕獲の難易度の高い、昆虫の賢者の座にあった。

だが、現在のクマゼミはどうだ。アブラゼミのごときふるまいが目立つ。どうしたものか。

クマゼミはもともと日本列島では九州～東海地方までの分布だった。一九九〇年代からは気温の上昇とともに北上し、いまは東京にも進出している。

個体数が増加すると、樹木以外にはみ出るしかなく、灯火に反応するなど多少頭が悪くても交尾に困らない、バカでもモテるという現状らしい。



二〇一〇年ごろ、日本語教育の教室で、三十四歳の私はいわゆる「ゆとり世代」の、十五歳ほど若い人たちと机を並べていた。グループ学習で彼らのコミュニケーション能力の高さに驚き、ノートの取り方も暗記詰込み教育世代の私と違い、筆の運びがなんというか有機的。「ゆとりの子たちって優秀なんだねえ」ともらすと「でも私たち、ゆとり教育は失敗だったって言われちゃった世代なんですけどね☆」という自虐のユーモアとシビアな状況把握力。最近の若者は…できる！

これはクマゼミとは逆の、個体数減少による愚かさの淘汰なのか。少子化による若者の数、ひいては日本人の数の減少。クマゼミのようではいられない、賢くないと生きていけない危機感が若い世代にはあるのだろうと思う。

四方八方興味津々

礒川朋美

令和三年二月、神戸市のＪＲ元町駅通過中の新快速電車に男性が飛び込む事故が起こった。ＪＲの新快速とは、敦賀～赤穂を繋ぐ電車（普通運賃）で、特に姫路～京都の約一三〇㎞の区間は、時速約一三〇㎞、約一時間四〇分で走行する。約一三〇㎞とは、関東でいえば、東京駅から沼津駅間にあたり、この距離を約一時間四〇分で繋ぐ電車が、朝ならば一時間に七本運行している関西の電車事情は、関東のそれと大きく異なると言える。

関西の人間と関東の人間が思う、神戸・大阪・京都の三都の距離感には、違いがありそうだ。

小川和恵

石を見ると書いて硯。我が家と縁のあった硯たち。
色も形も、きめの細かさも、一つとして同じものはない。
硯は愛玩されてよい墨と巡り合い、長い年月、ただそこに美しい石でありつづける。
これだけの装飾を施す価値のある、よい石質である。

第十九号批評会記

中村 恵

四月十一日（日）午前十一時から、「COCOON」十九号の批評会が行われた。Zoomを使ったオンライン批評会はこれで五回目となる。

参加者は掲載順に、久保田智栄子、白川ユウコ、中村恵、三沢左右、清水佑太郎、小島なお、椎名恵理、山田恵里、河合育子、有川知津子、大松達知、伊田史織、大西淳子、田中泉、小川和恵、柴田佳美、斎藤美衣、片岡絢、水上芙季、礒川朋美、小島ゆかりの二十一名。山田菜々子氏が初めて、谷川恵氏が前回に続き二度目の見学にいらした。まずは簡単に自己紹介を行い、巻頭作品から順に評を始めた。

小島ゆかりさんからは、表記の問題について指摘があった。漢字での表記が常用化している言葉において、敢えてひらがなやカタカナを使う場合、その表記方法が「生きて」いるかをよく推敲する必要がある。また、地名を入れることによってその地の歴史を背負うことができ、効果的だとの指摘もあった。

大松さんからは、「いかにも脚本家が書きそうな表現ではなく、他の人と違う表現を」「ごちゃごちゃ言わないことで説得力が生まれる」など、引き締まる思いのする指導があった。

ゆかりさん・大松さんとも に今回よく言っていたことは、「個性を生かすのはリズム感と言葉遣い」「短歌はリズム」など。音も大切だと言う。副助詞「は」と格助詞「が」で迷った時、音の響きから「は」を取ることも有効なようだ。また、「義母」など「音が壊れてしまう」場合、馬場あき子さんがされているように最初の一首に詞書を添えて残りは「母」や「はは」などとする方法もあるという。河野裕子さんの「ドーナツ」の話も出た。読者を信じて、全ては言わないほうが伝わるとのことだった。

まとめとして、大松さんは「創刊頃に比べて抽象的な度合が増えているのがよい」「真面目な人が多い中、それを越えようとするチャレンジがある」「好き勝手に詠みましょう」と言い、のびのび詠うことの素晴らしさを思った。

今読み返す一冊

椎名 恵理

原 阿佐緒歌集

『死をみつめて』

（短歌新聞社版）

寂しき春を越えて

『死をみつめて』は、『涙痕』『白木槿』につぐ原阿佐緒の第三歌集で、大正十年十月に発行された。大正五年十一月から十年九月までの作品五三〇首が収められており、その概ねが「アララギ」の作品である。阿佐緒の「アララギ」入会は大正二年で、斎藤茂吉や島木赤彦に師事した。

あまさかるみちのくの国におとろへてわが病み居れば夫にも逢はず

巻頭の歌である。阿佐緒は、裕福な家庭の一人娘として大切に育てられていた。しかし、絵を習いに上京した先で妻子ある教師、小原要逸との関係を持ち妊娠、出産、離婚、その後に再婚と人生は目まぐるしく変化していく。巻頭歌を詠んだ頃、阿佐緒は二番目の夫、庄子勇とは既に別居し、郷里で子どもや母と暮らしていた。二度の離婚を経て『死をみつめて』では、生活の寂しさやみちのくの自然を多く詠んでいる。

病み起きのたゆき体をやうやくに夜の囲炉裏によせて見にけり

児らのため夜のゐろりに銀杏を焼きつつ寂しみちのくの家に

病弱な体をなんとか動かしている様子がわかる。この二首を含めこの頃は夜の歌が目立っており、思うように動かない体を生活のためになんとか動かしていた。

二首目が載る頁には「寂し」「さびし」「悲し」の語が続いており、銀杏を焼く一場面を含め、晩秋の哀感を想像する。

ものもいはず寝台に寄りし吾子の手を手握りにつつ涙流れけり

歯をやみて夜中の床に泣く吾児の頬に手をあてすべなし吾は

痩せたりといひて吾が背を洗ひくるる子が手力(たぢから)を嬉しみ湯を浴む

阿佐緒の写真を見ると、ハイセンスな髪型や美しい容姿の恋多き情熱的な歌人の印象がある。しかし、ひた向きに子どもを愛する歌は純粋である。歯痛に泣く吾児の頬に手をあて、痛みを和らげんとする愛情深い母親としての姿がくっきりと映る。

吾が従兄狂人となり耕さぬ裏畑に茶のはな咲きにけり

夜を徹せる狂人の叫び止みたれば鶏鳴くきこゆ吾は眠らず

一首目は「叔父に」の一連にある。阿佐緒の従兄は精神疾患を発症したのだろう。耕して作物を育てるべき畑は手入れをされずある。静かに咲く茶の花に叔父への思いが託される。二首目は「寂しき春　その二」の一連にある。久しく病みつつ過ごす阿佐緒は、玻璃戸越しの蛾の羽の動く音や鳴き続ける蛙の声、雨漏りが桶に挿す音と共に人の叫びを聞き、朝を迎えていた。身内に向ける「狂人」の語はどうしても苦しい。

もの学びに郷(さと)をいづる日近き子の新衣せめて吾が縫はましを

郷人(さとびと)のそしりうけつつもの学びに子をやる吾の心知らめやは

寒国に住まふ吾子らにえりまきをおくりやらむと寝つつ思へり

阿佐緒に対する周囲の目は優しいものばかりではなかったが、母として愛情深く子どもらを育て、阿佐緒の父がそうしたように、学ぶ機会を与えた。送り出すその日のための新しい衣を思う母の素直な愛情がある。「吾子ら」は、阿佐緒の子と、親友の三ヶ島葭子の子である。三ヶ島は、歌人として時に母として、喜び苦しみを分け合い、生涯を深い友情で結ばれていた。友、三ヶ島と訪ね合う歌も多く詠まれている。大正十年に報じられた阿佐緒の恋愛問題においても、大きな助けとなっていたという。

おのおのの子に送る品を買ひもちて雨のちまたを友とあゆめり

友が子は今日より田舎にゆきにけり片隅に小さき下駄ののこれる

当初、『合歓木の花』と名付けられる予定であったこの歌集が『死をみつめて』になった理由、そしてこの一巻を持って過去に別れを告げるという阿佐緒の決意が、序言に書かれている。阿佐緒は情愛に奔放だったのか、翻弄されたのか。それでも懸命に生き抜く一人の女性を強く感じた。

うつそみのいのちにひびき音をたてて自が髪は断(たた)る吾が手掌(たなうら)に

水上 芙季
しゆんりん

この春も桜は咲いて桜から見られてをりぬ無口な人びと

遠巻きに見てゐるわれら〈謁見〉といふ語を思ふ桜満開

札幌とビデオ通話でつながつて友のカーテン閉める音せり

懐かしき人々心に繰り畳ね会へない会はないすでに葉ざくら

残業の依頼が向かひの上司からメールで来たりメールで返しぬ

春霖の向かうに見ゆる病院よ林檎を食べてくれば良かつた

菌類のサルノコシカケ科の茯苓（ぶくりやう）入り漢方処方されたる四月

ささがにのくもり硝子に閉ざされて病人めくわれ白湯を飲みたり

病院のそとの丸椅子に腰かけて唾液採取すＰＣＲ検査

トースターの目盛りをぐつとひねるとき時間の無さがわが身を駆ける

ＰＣＲ検査結果は電話でくる。

〈いんせい〉とメモを取りをり〈陰性〉と漢字にしたり礼を言ひつつ

ヒトはみな涙壺なり一人ひとり大きさ在りて耐へて待ちをり

松井 竜也

過去分詞

雨粒を丸く弾いて石材の準備されおり墓石屋阿久津

裡側に余白なきまま夏になる　蒲公英はもう行ってしまった

靴底が重さを増してゆく午後にため息に似た雨降りはじむ

過去分詞の形をしているものたちを心に放し飼いにしており

遠く遠くヨーロッパからやってきて日本で増えて枯れてく豚菜

柔らかき中身を護る殻を持つ甲殻類に大き鋏あり

長崎の歴史に触れて原爆に触れて妻の故郷に触れる

淡々と闘争の記録なぞりゆく歴史年表にひとつ下線ひく

今日という日は二度とない　自棄にガリガリ君を食べたくなる朝だ

焦(こが)されて砕かれて熱湯を掛けられて魂抜かれて珈琲豆は

残された時間を思うこともあり　冷蔵庫には酎ハイ２本

ジンバブエの首都がハラレと知っているそれだけで良い夜もありたり

松井 恵子

蛙の子

コンビニのコーヒーを飲み干すたびにカップを捨てて、擦り減つてゆく

よそ者であるさびしさに濡れながら歩いていたかあの頃の父

海そばにパチンコ屋ができたころからはじまるあの町での記憶

幼稚園あがりより保育園あがりの同級生に発言力ありき

田に動くもののひとつとなり動く老人の姿は樹木めく

甘夏の木に太りゆく球形のひとつひとつが山辺を照らす

怒鳴る父がおそろしかつた夕暮れは山をどんどん太らせながら

黒黒とお椀に運ぶ蛙の子　いつか死ぬのだわたしも父も

帰郷とはいつも悲しい行為にて悲しむためのお土産を購ふ

死ののちの父は静かでお供への酒は飲まない煙草も吸はぬ

わたしにも大事な家族できたことただ告げるのみなれど泣きたり

生き死にの外にも山は暮れてゆき青蜂が頭下げて横切る

三沢 左右

火

火の上に少しづつ色かへてゆくポット見つめつつ昼を往く春

橋かけて舟うかばせて海の上を足裏ちひさき人間のゆく

丸文字の値札つけられドラッグストアチェーンの棚に並ぶ日本酒

火中（ほなか）には眼球二つ海の死を悼みつつ魚を待つ小料理屋

三十三尋…約五九メートル

三十三尋の鯨のその御身切り頒（わか）たれて七浜光る

打ち上がり死にゆく鯨できるならあふむけにしてやりたしと思ふ

抒情せよ　むかし鯨油の灯（ともしび）に照りけむ珈琲の深き黒

「鯨脂」ではなく「鯨油」
身に油たたふる鯨（くぢら）油凪ぎの海に死ぬれば海に釁（ちぬ）るを

吸血鬼のすこやかさなど思ひつつうすく削がれし豚肉を食む

〈ふぐたい天〉と書かばいかにも旨さうと丼の米寄せつつ思ふ

かくも手に馴染みたる箸さはあれど強く握りしことかつてなし

週末からは休業
料理屋の〈営業中〉の貼り紙に苦むすごとき思ひは来たる

伊藤 祐楓

わずかな強さ

新調の家具の匂いのピアノ来てカバーのようにバイエルを買う

半年に一度は娘との距離を調律したい和音さがしに

照明の演出のごとあかときに霞のかかる常陸野は春

雲よりも時にはこれも良いかもね黄砂に曇るおぼろ満月

ふたまわり小さきマスクを買い足してコロナのこわさ怒りに変わる

初恋という花言葉よく似あう白きつつじはわれを浄めて

どこかしらひとの一生に似通った一年草の花また枯れ葉

ざわざわと葉桜の声聞きながらはなびらつつく小鳥の二匹

陽を透かすけやきの葉たち優しくてわれの居場所を作ってくれる

今日明日のことだけ考え生きる日々あさって？遥か遠い未来よ

木曜日深夜ひとりの逃避行（ランデヴー）筑波嶺めざしアクセルを踏む

悲しさはかなしさであり愛しさは他人のためのわずかな強さ

小島 なお

右上に月

瘡蓋を剥がして夏を待っている清く正しくやってくる夏

ぎっしりと不安を詰めて歩く鳩午後の日差しのなか追いかけて

靴紐を結ぶ背中に手を置けばしばしあなたの余白となりぬ

このみずはうしろに流れているみずか川も疲れている昼下がり

街灯のあかり領するこの道に私を領しすぎる私は

足首から夜に入りゆく踝は全身に鳴る鈴であるから

東京の巨大な顔に被せやるハンカチとしてこの夜時間

棒グラフ一本ずつの柱立ち右上に描く鉛筆の月

別の世で捨てたあなたか立葵首のあたりがいつもひとりだ

置いていかないで　スカート　枯野原　私を置いていかないで　息

人づてに知ることばかり退屈に今日はモッコウバラを飾って

蛇行する思いを人にあてがって日がないちにちその人を抱く

椎名 恵理

二番目の敵

捨てるモノ捨てないモノを決めるため網戸の端からする拭き掃除

やわらかくうすき赤子のくちびるをいたわる円き木製の匙

紋白を数えるように好きなとこ言い合い暮れる三月がある

愛犬の口髭に我がくちびるが触れる距離から歌うララバイ

飼い犬に子守唄きかせ始めたらまずいと言われそれでも唄う

口髭に小手毬の葉はからまって巻き舌の「ら」の音で春過ぐ

愛犬の胸をブラシで撫でおればしろくてほそくやわらかな毛の舞う

留守番をひたひた眠る犬映すわんこカメラの性能は良し

選ばれてママになったのではなくて君の首輪に君の名の刺繍

「ＲＯＹ」の字の刺繍刻みしハーネスは君の自由の二番目の敵

母親をばばあと呼びし少年が展示のダイニングテーブルなぞる

留学生クイズ大会の景品を楽天で探すＡｍａｚｏｎで買う

渋谷 美穂

鴨川の歌

京阪線出町柳の駅を出てスキップ百歩鴨川に着く

鴨川でふわわわわぁと息を吐くオオサンショウウオは何匹いるの

２０１５年７月、台風11号が去った後の鴨川で流されてきたオオサンショウウオが発見される。

のろのろと芝生の上を闊歩する雨上がりの王京都に住まう

新聞紙をぐるぐる丸めて振り回すバッター一番砂利石を踏む

靴下を靴の奥へと押し込めて飛び出す下るタオルも持たずに

菜箸のような脚を川に刺し食事をはじめる白鷺一羽

人間も網を持って飛び込めば魚を取り合う仲間になれる

百トンの網を投げ込む気合い入れ虫取り網で小鮎をすくう

低く低く視線を落とせばお隣のちょっと茶色い鷺と目が合う

川砂利を指の隙間に敷き詰めてじんわりと押す毛細血管

苔むした魚道へ何度もはねてゆく小魚の鰭空中を漕ぐ

川底で袖振るように揺れている葉へと託すまぁるいいのちを

早川 晃央

うし

なぜか牛を見にいこうってなったから〈まきばの風〉へいく日曜日

映えばかり求めるばかり牛ばかり撮る日も使うビューティプラス

〈牛さんはお外にいます〉放牧地の牛口密度０．２頭／ｋ㎡

牛は牛でも乳牛と肉牛は入ることなし同じ柵内に

この牛の父牛はどの牛かなと指差しあうもよし放牧地

牛の四肢の間をちょいと失礼と乳とる人に牛は動じず

牛の乳キュッキュッと絞りとった液まだ牛乳に遠く黄色い

牛乳をうまい！といって飲んでいるどの子の乳かわからずに飲む

どこででも牛は糞する人にみられているときも気にせずにする

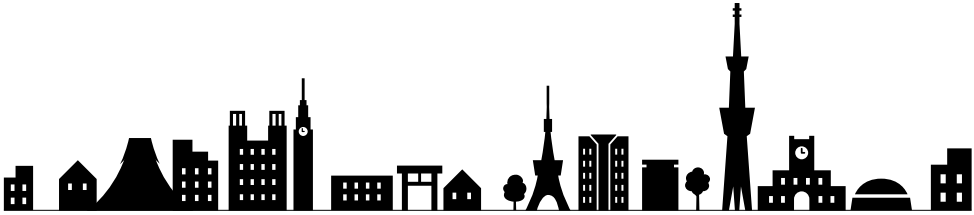
「牛になりたい（笑）」という君「えっ？（笑）」という僕を横目にあくびする牛

おいしいねおいしいねって次々に網から口に運ばれる舌

iPhoneで寝ている牛にハイチーズ加工で白と黒が際立つ

高野公彦にとっての皇室と中国・韓国

大松 達知



平成時代が終わった瞬間、この歌を思い出していた。

殺人者（マーダラー）の裔の裔にて靴べらのやうな顔した平成の人　　高野公彦『地中銀河』

「古代考」と題された一連。持統天皇が大津皇子を死に追いやった事件を中心にイメージされた十首。その最後にさりげなく置かれている。マーダラーと読ませて音の響きを緩めてはいるものの、強烈な初二句。そこから明仁天皇の容貌をつるりとしたリズムで揶揄する。この「靴べら」は携帯用の手の平サイズのものだろう。〈ポケットに在る靴べらの曲線を静かに愛す満員車中にて『渾円球』〉がある。

掲出歌は平成三年の作。まだ明仁が天皇として一定の評価を受ける前である。その後、生前退位や葬儀形式をめぐる改革や、右傾化する安倍政権に対抗する形での外遊や発言があった。（天皇こそ左翼的だとする人もいたほど。）それを考えると、個人としての明仁を「靴べらのやうな顔」と呼ぶのはやや気の毒な気もしないでもない。

ただ、高野には個人としての天皇でなく、天皇制ひいては日の丸・君が代に対する拒絶感がある。生の歓喜と死への畏怖を中心に広い題材を詠んできた作者。そのなかにときおり登場する〈社会詠〉にも詩的な鋭さがある。反原発の態度は、東日本大震災のずっと前から繰り返し詠まれてきた。現代文明や都会への違和感も多く詠まれている。と同時に、「日本」という国家

や政治への苛立ちも大きなテーマである。その文脈におけば、〈反皇室／君が代／日の丸の歌〉をわざわざ表明する歌も自然な流れの中にある。一つ目にはそれらをまとめたい。

二つ目としては、〈中国・韓国への思い〉に言及した歌を見たい。現在も中韓は日本への挑発を繰り返している。しかしその源を考えれば、日本側に非があることは明らかだ。高野は一貫して、両国への敬意と親愛を表す。あえて詠んでいると思えるほどである。

では、一つ目。

なぜか思ふなぜ思ふのか皇居前ゆくとき象の墓場を思ふ　『水行』

塵埃車出づる見る無くひつそりと水に囲まれ皇居あり　夏　『天泣』

なんぢ、もし禁裏の前で湯放るとも　わが灰皿にゴミを捨てるな　『渾円球』

法律を入れざる大き幽暗が千代田区にあり濠めぐらせて　『青き湖心』

象の墓場は、皇室制度の薄気味悪さのイメージ。死期近い象が集まると言われる架空の場所。皇室という巨象がいずれ倒れる予感のようだ。あるいは、ゴミ処理方法すら秘匿されているのは陰蔽された空間の象徴だろう。それに、皇居前での立小便のイメージも戯画的で痛快。四首目では、千代田区という無機質な単語が効く。治外法権的な場でありながらも一般市民と同じ行政区画内にある場所。（法律うんぬんはややこしいが。）実際、夜の都心では皇居は不自然なほど巨大な暗闇だ。〈幽暗〉がその語感ともども一首を引き締めている。それぞれ、〈主張〉を伝えるために明快な構図で作られていると思える。

皇族に生まれたならなぜ高貴なのか人間の〈血〉に貴賤などなし　『水行』

「皇族は税金払ふの？　はんたいに税金で食べてゐるの？　お父さん」　『天泣』

一方、この二首。巧くない。一首目。現代では皇族が高貴だなんて信じる人は少ないだろう。（そうでもないのか？）それでもあえてそう指摘するところに根深い憤りが感じられる。二首目は「地下鉄車中にて。」と詞書がある。だが、生硬で唐突な脚本のようだ。しかし、そのぎくしゃく感そのものが皇室に対する一般市民からの距離感の表明なのだ。

これらは、歌業全体の「思想」（これは高野が嫌う言葉だが）を知る手がかりになるテーマだと思う。

君が代といふ応援歌かの家のためにうたふな眠るみどりご　『地中銀河』

「君が代」を疎みゐたれば視野の奥あな逃げ水のかがやきにけり　『天泣』

君が代は古き和歌にて可も不可もなき和歌なれど我はうたはぬ　『甘雨』

権力の強制ありてうたふなら全濁音でうたへ君が

代

なども、反権力の矜恃を示したものだと言える。「国旗及び国歌に関する法律」は一九九九年（平成十一年）の公布。その前後には学校現場での君が代歌唱強制問題が起こったりした。二首目は、太平洋の島々で熱暑のなかで亡くなった兵士たちを思っているのか。あるいは、終戦の夏の象徴かもしれない。三首目は、その和歌自体を腐す。無関心を装いながら黙っていられないのだ。四首目には詞書に「ギミガヨバ、ヂヨニヤヂヨニ、ザザレイジノ……。」がある。言葉で和歌を汚すという歌人にとって最大の抵抗を思いついたのが強烈。（古歌には「苔のむすまで」を「苔のむす豆」とパロディ化した例があるようだ。）

日の丸を詠んだ歌では、

マラソンの沿道にあまた人の振る日の丸みればたましひ寒し　『淡青』

日の丸を我は所持せず　言ふならば「君主（くんしゅ）山門に入るを許さず」　『地中銀河』

将棋連盟会長となりし勝負師の米長邦雄は日の丸崇拝者　『天平の水煙』

などがある。まだ『淡青』（三十代半ばの作品）のころには、強い社会詠は少ない。（『水木』にはデモ参加の歌など時代の空気感が伝わる歌は多いが。）そのなかで、一首目の「たましひ寒し」にはのちの主張への萌芽が感じられる。全体でひとつの方向に流れてゆくことへの抵抗。これは文学者に不可欠な要素である。

『淡青』の同じ一連の七首あとには、

満洲に兵たりし父戦後なほ日の丸を秘む揚ぐる無けれど

がある。元兵士たちは戦後多くを語らなかったという。高野の父もそうだったのだろう。父親の複雑な心情をそのままそっと受け入れる。それ以上でも以下でもない。時代も教育も違う。ひとりの戦争経験者のその後を語ったひそかな秀歌だと思う。

掲出歌に戻る。二首目の〈君主〉はもちろん〈葷酒〉のこと。ヒノマル問題の重さを言葉遊びで茶化す。その軽さが問題への答えなのだ。米長は東京都教育委員だった。園遊会での国旗国歌強制発言を明仁天皇にたしなめられた件（二〇〇四年）を受けてのものだろうか。エキセントリックな言動のあった米長（高野の二歳下）。将棋の才能と無関係に体制側に回った人物へ不可解さ、怒り、悲しみが混交しているようだ。

さて、ここからは二つ目の〈中国・韓国への思い〉を見る。それらは詩的芸術としての作品であると同時に、文学者としての歴史への〈責任ある発言〉の側面もあると思う。

韓国を犯し蔑（なみ）せし歴史あり韓国は兄と我は思ふに　『天泣（アンジュクン）』

日本良しさくら美しされど憂したとへば安重根を思ふ時など

韓国は兄にてあるをわが国は悌足らざりき秀吉以降　『甘雨』

中国が父、日本が弟との把握が根底にある。歴史を思えば当然なのだが、それをわざわざ詠むのは強い気持ちがあるからだろう。戦中派の〈責任〉すら感じとれる。昨今のヘイトスピーチやいわゆる政治的な戦前回帰の風潮を諌めるようでもある。そのきっぱりとした口調が痛快だ。それは、父や宮柊二の戦争体験、五、六回参加した山西省訪問ツアー（宮英子氏発案で宮柊二の戦績を尋ねたもの）、そのほか中国・台湾・韓国へのいくつもの小旅行という実体験が思いを強くさせた側面もある。その方向は歴史だけでなく、現在の三国関係にも触れる。

アジアにてアメリカ寄りの日本よ日本人よ倭奴、ジャップ　『甘雨』

宇宙船〈神舟〉5号生還す富みて中国に遅るる日本

ともに二〇〇四年（平成十六年）の連続する二首。ジャップとまで言って、忿懣が弾けたような痛烈さだ（韓国もアメリカ寄りだけれど）。二首目。この時点では「富みて」と言っていられた日本。そのあと一気に経済発展的には中韓に抜かれてしまったことを思うと哀切でもある。日本の名目GDP値は二〇一〇年に中国に抜かれる。今詠むなら「中国富みて遅るる日本」なのだろう。

また、言葉面での中国語・韓国語への親密感も良い。人力をいとしむならむ自転車を「自行車」と呼ぶ　『水苑』

中国ぞ良き　『甘雨』

くもりなき中国人の脳よしゴールキーパーを〈守門員〉と訳す

朝鮮語をはなす女の低き声きこえてやさしラッシュの車内　『天泣』

それぞれ、言葉だけでなくそれを使う人々を嘉している。政治経済歴史関係のすべてを取り除いた、文化同士の素の対等な関係を思う。

最後に金鶴泳氏を詠んだ歌を挙げる。

在日朝鮮人金鶴泳氏の吃音は先天的にして単純ならず　『汽水の光』

朝鮮語の弔辞を聴けば生ける日の君より聴かざりしするどき言葉　『地中銀河』

東大大学院を出ながら、日本での生きにくさを感じて自殺した在日二世の作家・金鶴泳。河出書房新社で担当者として接した高野。彼との接触ものちの歴史認識に影響した可能性もあるだろうか。

これら、皇室や隣国への視線のほかに〈如露といふやさしき道具愛したる民族にして真珠湾攻めき『青き湖心』〉のような、日本自身に矛先を向けた秀歌もある。また二〇一二年からは、安倍政権の強引な政治手法を直截に非難した歌も多い。次の歌集ではどうまとめられるか楽しみだ。

古典和歌はおもしろい

小島 ゆかり

つきて見よひふみよいむなやここのとを
とをと納めてまたはじまるを　　良寛

『蓮の露』の一首。

良寛は、江戸後期の托鉢僧。その年譜には諸説あるが、大まかに記すと、新潟県出雲崎の名主の家に生まれるが、十八歳で家を棄てて曹洞宗の寺に入る。さらに岡山の円通寺で修行をするが、そこも離れ消息不明となる。西国行脚をしたと思われる三十代の時期である。そして四十歳のころ、故郷越後に戻り、現在の燕市の国上山国上寺の五合庵、乙子神社の草庵に住み、托鉢しつつ詩歌を作り書を書いた。

出雲崎の名家であった家（橘屋）が、家財没収所払いの処分を受けたのち、六十九歳で現在の長岡市島崎の百姓代・木村家の庵室に移り住み、その最晩年に、若い貞心尼と出会う。

これぞこの仏の道に遊びつつくやつきせぬみのりなるらん

「あなたさまが毬をつく、それが仏の道に遊ぶこと。ついてもついても尽きることのない、仏の道なのですね」。

この貞心尼の歌への返歌が冒頭の歌。

「ついてみなさい、一二三四五六七八九十、十で終わってまた始まるのだよ」。

一見、童謡のような大らかな表現であるが、読めば読むほど謎めく一首。良寛独特の、時間の無限循環の世界に吸い込まれそうになる。

良寛七十歳、貞心尼二十九歳。やがて二人はともに暮らし、良寛は貞心尼に手厚く世話をされながら四年後にこの世を去る。良寛没後、貞心尼の編んだ『蓮の露』には、最晩年の良寛と貞心尼との、愛の贈答歌が多く収められていて、なにかほのぼのとするような、呆然とするような。

良寛には、空間認識においても無限の入れ籠構造を思わせる歌があり、その不思議の時空は、無限循環の詩型ともいえる短歌とまことに相性がいい。決して、毬をつくばかりの和尚さんではなかった。

COCOON 誕生

大西 淳子

この日集まったのは、岩﨑佑太、大松達知、片岡絢、小島なお、小島ゆかり、島本ちひろ、水上芙季、大西淳子の八名。

二〇一五年四月一九日(日)一三時。場所は、赤紫の天鵞絨の椅子がレトロな、煙草のにおい漂うルノアール新宿3丁目店。

「桟橋」終刊後の新しい同人誌を創るため、関東在住者ということで、お声がけ頂いたのだが、私は転居したばかりで、在住歴は三週間だった。新宿周辺には、ルノアールが何店舗もあるという。都会はコワイ。けれど、大松さんが、近くの伊勢丹で待ち合わせてくださるというので助かった。感謝である。

店に到着すると、既に小島親子がいた。ここでランチを食べつつ、場所取りしてくださっていたのだ。なんとさりげない心配り。

なおさんのことは知っていたが、なぜか十数年お会いする機会がなく、この時が初対面。他に、ちひろさんも初対面だったが、関西弁がとても親しく感じられた。

定刻には全員集合。ゆかりさんが会計用と議事録用にノートを二冊持参し「今日は私が書くね」と率先して手を動かしてくださった。

まず、会の名称を決める。一人一案発表することになり、私は固まった。丸腰だった。ゆかりさんが「じゃあ私から。ん～山鳩」と言い、空気が和らいだ。渋い。渋すぎる。

パピルス、埠頭、獏、蒔く、くも(雲)、ミケ、さえずり、多面体……。

順に発表していったが、どれもしっくりこない。皆の頭の上の電球は、それぞれ点いたり消えたりしていた。とその時、なおさんが「COCOONはどう」と言った。全員の電球が一斉にパッと点いた。高野公彦さんの歌に詠まれている不思議な存在感、若手の繭のイメージ、蝶になり飛翔するイメージ、COSMOSのCO。すべてがピタッときた。

この日は他に、案内状の内容、日程、参加を呼びかけるメンバー等を決めた。

COCOONという名をつけ、COCOONになった私達は、もはやCOCOON以外の何者でもない気がしていた。

質問

好きな数字とその理由は？

清水 佑太郎（しみず ゆうたろう）（東京）1986 年生まれ。
13。受かった試験の受験番号でした。一般的には不吉な数字で不人気なのが良いです。

片岡 絢（かたおか あや）（東京）1979 年生まれ。
ぱっと浮かんだのは 4 です。「よん」という言葉の響きがやわらかいのと、4 月の桜のイメージがあるので。

小島 なお（こじま）（東京）1986 年生まれ。
0。わが歌を人工知能が詠まむ日のわれ美しく零 (ゼロ) を生くべし　水原紫苑。

柴田 佳美（しばた よしみ）（東京）1976 年生まれ。
59 ？です。「コクーン」の音を数字の語呂合わせで表現しました。

渋谷 美穂（しぶや みほ）（東京）1989 年生まれ。
31。もちろん「みそひともじ」の 31 です！次点で 13。

水上 芙季（みなかみ ふき）（東京）1980 年生まれ。
「6」が好き。理由は達磨のような丸みのある見た目、2 でも 3 でも割り切れるところなど。

斎藤 美衣（さいとう みえ）（神奈川）1976 年生まれ。
13 が好き。素数はミステリアスだし、1 のきっぱりした様子に 3 の丸みのある形もバランスがよい。

小川 和恵（おがわ かずえ）（新潟）1974 年生まれ。
1212 です。イチニ！イチニ！と行進しているようで、この並びがいとおしい。

伊藤 祐楓（いとう ゆうふう）（茨城）1982 年生まれ。
3。90 年代後半に、F1 でミハエル・シューマッハがよくつけていたカーナンバーだから。ミカ・ハッキネンとの激闘、懐かしいな…。

松井 竜也（まつい たつや）（茨城）1982 年生まれ。
3。安定するし、De La Soul が好きなんです。

松井 恵子（まつい けいこ）（茨城）1982 年生まれ。
37。なぜ好きなのかわからない。年齢としてはもう超えてしまったなあ。

島本 ちひろ（しまもと）（埼玉）1990 年生まれ。
2 が好き。形が可愛い。「にー」て発音もいい。猫の「にゃん」の語呂合わせ。寒色っぽい。あと偶数の親玉だしね。

大西 淳子（おおにし じゅんこ）（千葉）1972 年生まれ。
1。2 じゃダメなんです。

大松 達知（おおまつ たつはる）（東京）1970 年生まれ。
451230。だいぶ個人情報ですが、誕生日です。元号嫌々派ですが、昭和 45 年。012345 がぐうぜんに入っています。もろもろの暗証番号、のはずはありません。

椎名 恵理（しいな えり）（東京）1986 年生まれ。
「11」。11 月 11 日が誕生日のため。誕生日をアピールしやすく覚えてもらいやすい良い日です！

いそかわ ともみ
礒川 朋美（大阪）1978 年生まれ。
26。生まれ日だから。月命日みたいな (ちょっと違うけれど)。どうしても目がいく数字。

つきした さくら
月下 桜（兵庫）1971 年生まれ。
3。ころんとしたフォルムが可愛い。

みさわ そう
三沢 左右（兵庫）1982 年生まれ。
迷いましたが…「2」で。手で書いたときに、まろやかにカーブさせて直線で締めるメリハリが好き。

くぼた ちえこ
久保田 智栄子（広島）1967 年生まれ。
2。昭和 42 年 12 月 2 日生まれで、全部 2 がつくから。ある本に、「2 は天使の数字」とも…（汗）。

なかむら めぐみ
中村 恵（鳥取）1979 年生まれ。
i 。ある数を x で表すと知った時、円の計算で π を知った時、そして二乗してマイナス 1 となる虚数を知った時、わくわくした。まだ秘密があるなら教えてほしい。

ありかわ ちづこ
有川 知津子（福岡）1969 年生まれ。
2。生まれ月だから 2。申し訳ないくらい単純な理由です。調べてみると、どの暗証番号にも使っていました。

いだ しおり
伊田 史織（福岡）1971 年生まれ。
「14」。私が生まれた日です。生まれて、育てられて、今、生きていることに感謝しています。

まじま ようこ
真島 陽子（新潟）1971 年生まれ。
小学生の頃から、2 が好きです。2 人、2 倍、半分こ（1 個が 2 個に！）、2 番手。きっかけは、A 君の名簿が 2 番だったから。

しらかわ
白川 ユウコ（静岡）1976 年生まれ。
486、よんぱる。大学時代についた渾名。（やや柄の悪い韓国人男子の名前？漢字では龍八）今もこう呼ばれています。

すぎもと
杉本 なお（静岡）1978 年生まれ。
0 です。見つめすぎてはいけない存在のような不思議な魅力を感じます。

はやかわ あきお
早川 晃央（富山）1990 年生まれ。
最近は「7」。コンビニはセブンイレブンしか行かないと決めてから、7 のつく日が待ち遠しい。

かわい いくこ
河合 育子（愛知）1965 年生まれ。
3。丸っこくてかわいい。円周率の先頭の数字。割り切れなさが素敵。そして 3 時はおやつの時間！

やまだ えり
山田 恵里（愛知）1965 年生まれ。
5 月 9 日生まれなので 5 と 9。5·9 で人生スタートし、たとえ業苦（5 う 9）に苛まれようとも、ゴールはきっと極楽（59 ラク）へ（？）。

たなか いづみ
田中 泉（大阪）1973 年生まれ。
「数字の 3 は、なぁに？赤ちゃんお耳、ぴくぴく」という歌の印象が強く、可愛らしい「3」が好きです。

繭の中から　2021・06

ついに二〇号。毎号、選歌はなくて、批評会はある。ゆるやかな緊張感のもと、目標の「楽しく詠み合う！」は達成できたと思います。ご購読の方々、感想のお便りをくださる方々、読んでるよいいねと声をかけてくださる方々、引用してくださる方々、感謝にたえません。中でも（メンバーではありますが）すべての造本の膨大な労を引き受けてくれている松井竜也氏には特に感謝しています。創刊号では〈言葉を確実に手渡す作品が必要なのだと思います。〉と書きました。その思いをますます強くしています。今後とも「コスモス」ともどもよろしくお願いします。（大松達知）

●

平成から令和にうつる春、島の菩提寺でもご住職の代替わりの儀がありました。僧衣をまとった人々が海を渡ってお集まりになり、それはそれは晴れやかに退山式と晋山式が執り行われました。木蔭と「COCOON」のあるお寺さんです。（有川知津子）

●

元々、詩を書いていました。試しに短歌や俳句を作って産経新聞に投稿するようになり、選者の小島ゆかりさんに何回か選んでいただいたのが、コスモス入会のきっかけです。その頃色々弱っていて、短歌が唯一の拠り所でした。（礒川朋美）

●

美術館で野口哲哉展が開催されている。展示内容は彫刻である。哀切極まりない様子のもの、時代や次元を超えた剽軽な様子のものなどある。感情さえも精緻なその侍達に、何のために生きていたのか、問うてしまいそうだ。（伊田史織）

●

歌にも詠んだが、最近ピアノを習っている娘のために、アップライトのピアノを買った。「最近バイエル練習してる？」と訊いたぼくに、「あー、あのつまんないやつ？」と返してくる、娘6歳。この子はピアノ、上達しないクチだな、と密かに思った。（伊藤祐楓）

●

二〇一五年三月、千葉に引っ越し、初めて東京歌会に出席した。その懇親会に多忙のゆかりさんも残って下さり、積もる話をした。そこで「桟橋」後の新しい雑誌の素案を聞き、発起人の一人として現在に至る。新宿西口の「魚や一丁」が私の起点。（大西淳子）

●

娘がはじめてキッズフリマに出店した。海で拾った、とっておきの貝殻をきれいに並べて、大人気のお店になった。親はお店が始まると入場することができない。終わって近づくと値札には「一つ百円。二つ五十円」…世界への愛を感じた。（小川和恵）

●

エクス＝アン＝プロヴァンスという、地中海の近くの、南フランスの町に行ってみたいです。画家のポール・セザンヌの出身地です。町を気ままに散歩して、日差しの下で、ゆっくりとワインを飲んだりしたいです。（片岡絢）

●

真夏の新宿、喫茶ルノアールの一室での第一回批評会が懐かしいです。まだ冊子化の前、プリントでの批評会でした。メンバー、読んでくださった方、関わるすべての方に感謝します。すばらしい出会いの、そして大切な学びの場です。今後ともよろしくお願いします。（河合育子）

●

大学生の頃、柿本人麻呂ゆかりの地、石見を旅した。石見の海の波打ち際や高角山の自然遊歩道を一人黙々と歩き、益田では柿本神社で神楽を見学するなど、充実した旅だった。同日の比叡山女子大生殺人事件を知ったのは、帰宅後のことである。（久保田智栄子）

アルベド、バッグクロージャー、イクトゥアルポク、大幅（たいふく）、リヴァーブ、いちゃりばちょーでー。これまでのコクーンの短歌に出てきた言葉たち。みかんの白いスジ、食パンの袋のアノ留め具、イヌイット語で…。文字数足りず。

（小島なお）

●

第一回目の批評会を鮮やかに覚えている。といっても批評会の内容はまったく記憶になくて、はじめてお会いした方々が、本当に生きている（！）のに感動した。名前や作品しか知らなかった方々が目の前にいるのがうれしい驚きだったのだ。

（斎藤美衣）

●

教室活動でやった「創作短歌」を気に入ってくれたのか、熱心に短歌を定期的に送ってくれる留学生がいる。みかんの歌とみかんのヘタの写真、自転車の歌とサドルが取れた自転車の写真を添えて送ってくるあたりに、独特なセンスを感じる。

（椎名恵理）

●

一年以上振りに趣味のビリヤードをしました。下手になっているかと思いきや、まったく変わっていませんでした。練習しても苦手なことは相変わらず苦手でしたが、十年以上やったことなら一年やらなくても体は覚えているのだなと思いました。

（清水佑太郎）

最近のペンケースは工夫がすごい。スタンドタイプ・伸縮型・巻き物型などさまざまだ。コクーンの仲間は意欲的で刺激を受ける。私の歌は、いつも代わり映えしない歌になっていないだろうか。最近のペンケースのように創造性豊かに歌を詠みたい。

（柴田佳美）

●

今年もベランダのプランターに種を蒔きました。バジルとメロンです。この本があなたの手元に届いている頃にはきっと芽が出てすくすくと育っていることでしょう。今年（こそ）はたくさんの収穫ができるといいな。

（渋谷美穂）

●

ずーっと続けていることって何かあるかなと考えてみましたが、殆ど思いつきません。短歌は始めた頃からは想像していないくらい長く続いていて、驚いています。コクーンのみなさまが大好きです。にじゅうって本当にいい響きですね。

（島本ちひろ）

●

茅場町の会議室で一緒にお弁当を食べる教室感、帰りにカフェに寄ってお喋りする放課後感。青春だなあ、という気持ちを味わえるのがCOCOONです。ああ、短歌の話と無駄な話がしたいなあ。有川さん持参のお菓子「一口香」ふしぎ。

（白川ユウコ）

●

自粛生活が続くなか、バリカンで父の髪を切ってみました。美容師さんの動画で予習をしてから臨んだものの、やはり出来栄えは素人。もし練習用に頭を貸してくださる方がいらっしゃればご紹介ください。髪型のご注文は承りかねます。

（杉本なお）

●

はじめてCOCOON批評会に参加した四年前の四月。実家に娘を託し、まずはランチ会場「コレド日本橋」に向った日の高揚感が懐かしい。リモート歌会に参加できるのは幸せだけれども、日常生活から離れて批評会に浸れる日が、また来ますように。

（田中泉）

●

文字どおり繭ごもりしていました。歌を詠むのは久しぶりです。COCOONではまとまった作品を出せるのと批評を考えるのが力になっています。それと自分の歌にもいいと思ってくださる仲間がいる。だから、もうすこし頑張れる気がします。

（月下桜）

●

ＢＴＳにハマりました。韓国の男性グループ、防弾少年団です。これまでハマらないようにしていたのですが、駄目でした。推しはジミンです。柔らかいところから硬いところまで、表情、歌、そしてダンスの表現の豊かさにめろめろです。

（中村恵）

手で折り曲げられる金属器で有名な能作という企業の工場に行ってきた。五百円で錫製の豆皿づくりの体験をすると、福引にも参加できた。抽選器から出てきたのは金色の玉で一等。商品はきのこ詰め合わせ。近くのきのこ工場から提供された物だそう。

（早川晃央）

●

三月のある日、朝礼で突然、異動が発表された。今までとは全く勝手の違うポジションを、「新採用の人と二人でやって」と言い渡された。驚きと不安で、何首か歌ができたほどだったが、相方は温和で良い人だった。短歌の仲間にもなってくれそう。

（真島陽子）

●

寝た。やっと下の子が寝た。二歳男児。とてつもなく元気だ。一緒にいる間中、パワーを吸い取られている気がする。実際、わたしの分のヤクルトやバナナも「ちょっとちょうだーい」の声に吸われるように消えてゆく。それが、ああ、寝るとこんなにも小さくいとおしい。

（松井恵子）

●

職場で「松井という人をカメラマンとしても使いたい」というメールを頂戴した。どうやら俺は「使う」対象らしい。にこやかに撮影現場の下見、段取りをして、カメラマンとしてありがたく使われてきた。これが大人の対応だ。近々辞めてやろうと思っていながらまだ言わないのも大人の対応だということで許してほしい。

（松井竜也）

最寄り駅までのちょっとした移動用に、折り畳み自転車を購入。付属の取扱説明書が「一般用自転車・幼児用自転車」のもので、折り畳み自転車の図解や説明はなし。購入時に畳み方と広げ方は教わったのでまあとりあえずはいいか。保証書はある。

（三沢左右）

●

一年ほど前から、家で家族と卓球をしている。「卓球」と言うと「家に卓球台があるの？」と驚かれるので〈テーブルテニス〉と言おうかな。食事用の小さなテーブルで戦っているのだ。ラケットは団扇にボール紙を貼ったものだ。想像以上に白熱します。

（水上芙季）

●

最近物覚えが一段と悪くなった。マスク姿の新入生の顔と名前を結びつけるのは、トランプの神経衰弱よりも難しい。二〇号の「繭の中から」を全員が担当することも、すっかり記憶から消えてしまっていた。締切二時間前に気づけて良かった…。

（山田恵里）

●

コロナワクチンは、65歳以上が優先ということで、64歳のわたしは後回しかあ、チーンとなっていたところ、今年65歳になる人も対象ということで、四月末のいま、接種券が届いた。すると、高齢者扱いかあ、ズーンとなった。心は不思議だ。

（小島ゆかり）

COCOON Issue 20

2021年6月15日

年間予約購読料　2,000円

一部定価　500円

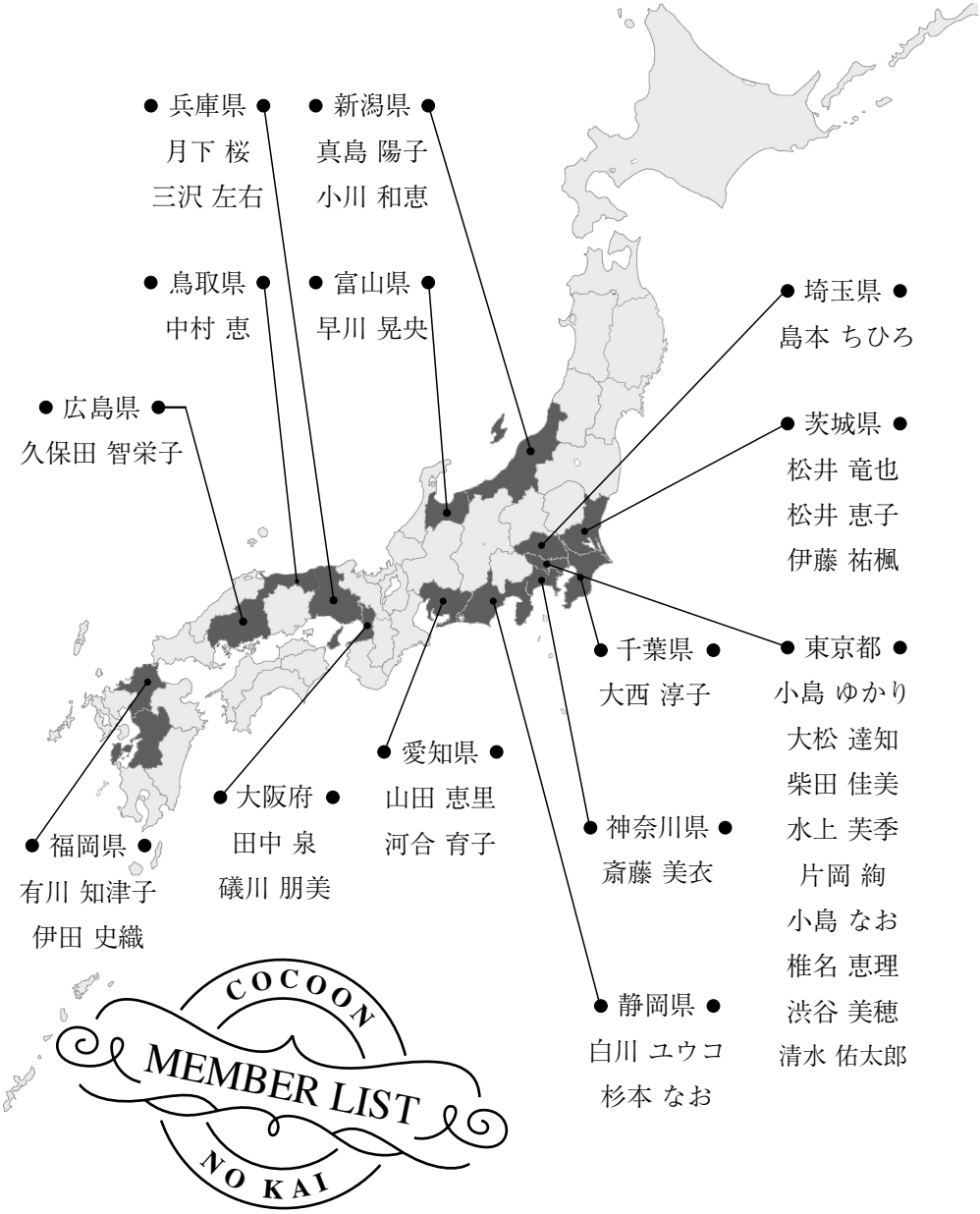
発行人　大松 達知

編集　COCOONの会　編集委員

編集協力　小島 ゆかり

デザイン　松井 竜也

HP　www.cocoontanka.net

© 2021 COCOON

COCOON NO KAI